

祐子は自分が弱気になっているのを感じた。ふと見ると、ボールの横の方に何か白っぽいものが見える。近付いてみると、カードのようなものが貼り付いている。そこには小さな文字で何か書かれていた。祐子は「どうして、今迄気付かなかったのだろうか?」と思った。ボールを持ち上げて文字を読んでみた。

「祐子、愛しているよ。自我を捨てて生き抜け。必ず助け出す。ボールに貼り付けた紙はボールが変化するとき同じ割合で拡大、縮小する。無心でないと剥がせない。無機質の紙以外は何も張り付かない」文字を読んでみると、祐子の目から涙が零れ落ちた。懐かしい賢の言葉だった。

「あなた、わたしも愛しているわ。あなたに会いたい!」祐子はそのカードを剥がそうとしたが、ぴったりと貼り付いていて、剥がすことができない。良く見ると、「無心でないと剥がせない」と書いてある。祐子は、「今日は無理だ」と思った。一呼吸置くと、ふとマリゼの言葉を思い出した。食事をしなくてはならないと思った。食堂には何時もの活気が感じられなかった。悲しみが部屋全体を覆い尽くしていた。3人の友達が食事をしていて、祐子の姿を見るとピピが頷いた。祐子は食事を受け取ってから3人の居るテーブルに着いた。

「Yuko, Samahani asubuhi hii.」(祐子、今朝はゆるしてね)ピピが言った。祐子は応えた。

「Kwamba mimi ilikuwa na makosa」(わたしが悪いのよ)マリゼが言った。

「Nina huzuni. Kwa nini Kuumiza watu.」(悲しいわね。どうして傷付けあうのかしら?)

スージが言った。「Waganda kale marafiki wazuri.」(ウガンダの人たちは、昔は仲が良かったのに)

祐子が言った。「Uganda mabadiliko. Wa Mageuzi wetu Uganda.」(ウガンダは変わるわ。わたしたちで変えましょう)

マリゼが言った。「Haiwezekani.」(無理よ)

祐子が言った。「Marize, Kamwe kuacha. Rwanda itakuwa vizuri.」(マ

リゼ、諦めたらだめよ。必ず良くなるわ)

食欲は無かったが、4人ともやっとの思いで食事を終えた。祐子のその日の夜勤は免除されていた。祐子は一旦病室に戻り、自分の担当している患者たちを訪問して勇気付けてから、今日運び込まれた兵士たちに、覚えたばかりのスワヒリ語で励ましの言葉を掛け、ジュタを見舞った。ジュタは傷口がすっかり回復してきていた。今日の出来事で病室全体が暗い雰囲気になっていたのも、ジュタは祐子の訪問をととても喜んだ。祐子の手を握ると、なかなか放さなかった。

「Mama, Yuko Mama . . . . .」

祐子はジュタの頭を撫で、抱き締めてから部屋に戻った。部屋に入ると間もなくピピがやって来た。ピピはまだボールに未練があるようで、部屋に入ると直ぐに

「Yuko, ball yuko wapi」(ボールはどこにあるの)

と聞いた。祐子がボールの大きさが変化したことを説明しようとしてボールに目を向けると、不思議なことにボールはまた小さなテニスボール程度の大きさに戻っていた。ピピは暫くの間、ボールを手に持って弄っていたが、やっとなんて元的位置に戻した。この日は人間の誕生や死についての単語の勉強だった。祐子は真剣に聞き耳を立てた。1時間ほどでピピは帰って行った。祐子はドアに鍵を掛けた。この部屋に来て、就寝前にドアをロックしたのは初めてだった。祐子はシャワーを浴びた。シャワーは水しか出ない。初めてシャワーを浴びたときは、その冷たさに飛び上がった。温度が低いではなかったが、シャワーを浴びるときの意識がお湯を期待しているためだと今では分かってきた。水と思って浴びるシャワーはこの熱帯地方では、体が引き締まって気持ちの良いものだった。バラックに抱かれることを意識した訳ではなかったが、身体の隅々まで綺麗にしたいという意識が、何時もより強く働いているのを感じた。石鹸など無い。できるだけ時間を掛けて全身を丁寧に流した。シャワーを浴びた後、下着を身に付けてからはたと考えた。ネグリジェは木綿のものにすべきか、それとも半透明のセクシーなものにするべきかである。はなから半透明のものを身に付けようなどという気は起きな

かったが、自分の立場としてどうすべきか迷った。その前に先ずネグリジェを着るべきか否かだ。普段着で居ればマリーの指示を拒否したことになる。それよりバラックへの隷属の拒否を意味することのほうが重大だった。金を支払って手に入れた女を普通の人間として扱ってくれて、看護婦という立場を与えてくれたバラックである。少なくとも木綿のネグリジェで居るべきではないか？しかし、バラックは自分に対して好意を持っているかどうかを見ているに違いない。それにどう応えるべきか？祐子は賢に相談してみることにした。ボールに眼をやると、ボールはまた元のように大きくなっていった。

「あなた、わたしは今、ある男の奴隷になっているの。その男はわたしを大切に扱ってくれるの。その男が今夜わたしの部屋に来るの。あなた、わたしはその男に黙って抱かれるべきかしら？それとも、拒否の態度を示すべきかしら？もし拒否すれば、多分また今までのような荒んだ運命が待っているような気がするの。あなたに対する貞操はもう無いのよ。だから、あなたに対しては唯、愛するしかないの。その男に抱かれてもあなたへの気持ちは変わらないわ。わたしはあなたが助けてくれるまで、ここで人々の為に生きる決心をしているわ。だけど、それもその男を受け入れるかどうかに掛かっているような気がするの」

ボールが反応した。赤と白の点滅をしている。この前と同じ反応だ。祐子は「この点滅は一体何なのだろうか？」と考えた。分るはずもなかった。賢が応答しているようには感じなかった。祐子はやむなく心を決した。一番良いワンピースを着ようと思った。そして、もしバラックが身体を求めて来るのだったら、その時にネグリジェに着替えようと考えた。初めからマリーの言うような、娼婦のような真似はすべきではないと考えた。祐子は意を決した。一番良いワンピースを着ることにした。薄ピンク色の生地、前後に2つずつ黄色と紫色の蘭の花柄がプリントされただけのものだ。木綿の生地だったが、祐子はこのワンピースを気に入っていた。まだ、一度も袖を通すチャンスは無かった。この服を着て髪を綺麗にまとめてバラックに対応しようと考えた。祐子は看護婦室から借りて来た爪切りで手足の爪を切った。化粧品は一切無い。シンクの前

の鏡で身だしなみを確認した。文字通りすっぴんだった。祐子はテーブルの傍に寄りボールを手にとって見た。カード状の貼り紙の文字をもう一度読み返してみた。

「祐子、愛しているよ。自我を捨てて生き抜け。必ず助け出す・・・」

祐子へのメッセージはほんの僅かだったが、それがすべてだと祐子は思った。そして、ボールに話し掛けた。

「あなた、わたしも愛しています。わたしの生き方を観ていて下さい」  
ボールの色がピンク色に変わった。祐子の心の中に言葉が響いた。

「祐子、生き抜いているか？どこに居る？・・・」

祐子は、ハッとした。ボールから反応があったのだ。賢に話しかけられているような感覚がした。その時ドアをノックする音がした。祐子はもう少しボールと意識の交換をしたかったが、「また後でしょう」と思い、ドアの傍に寄って言った。

「Mtu yeyote huko?」（どなたですか?）

「Barack」（バラックだ）

所長は無事元の場所に戻り、原智明研究会の会長に復帰することとなった。垂水の実家に赴き、そこに秘蔵しておいた資料を取り出して原に返してよこした。原はそれらの資料をベースにこの世界の構造に関する理論を確立した。賢にその理論の説明を行ったが、賢はその理論の元になっている複素関数を理解することができなかった。ただ、その理論の概念は把握でき、それが自分の考えている内容に合致しているので、非常に驚いた。賢は原の能力が人間離れしていることを実感した。しかし、この理論を理解できる人間がこの地球上には存在しないことを思い、原と相談してその理論は公表しない方針を固めた。現象界から幽界を覗く方法、宇宙的な災難、たとえば彗星の衝突を避ける為の物質破壊を誘導する方程式、物質を関数表現してそれを分解し要素から再度物質を構成する理論など、これまでの常識を覆す個別理論と、写像としてのこの世界を表す複素関数で構成されている理論だった。原はそれらの理論をべ

ースにボールの試作や実験を続けていた。ボールの試作は思わぬ方向に向かっていった。この日、賢は原にボールの試作の状況に附いて聞いてみた。

「原さん、ボールの試作は進んでいますか？」

「ええ一寸方向が変わってきました。初めは球形のモデルを作ろうとしていたのですが、材料の加工がしにくくて球形の構造の中に電気回路を埋め込むことと、球面全体を表示機の画面にするという技術を開発するのは並大抵でないことが分ったんです。実験室レベルでは時間を掛ければ作成可能なのですが、多分現在の生産技術では製造が難しいと思います。特に球形の表示面を半分に割って、半球の空洞の内面に液晶幕を構築する技術が一朝一夕にはできないことが分かりました。それで、とりあえず立方体の表示機を作成することにしてみました。球形にも未練はあるんですけど止むを得ないと思います。これなら現在のパソコン用の液晶表示機を流用して実現することが可能だと思います。勿論、12の稜線部分に駆動部が来てしまうので、全面表示は難しかったのですが、6面それぞれに独立した内容の情報を表示させることはできました。試作したボールじゃなくて箱を愛子や亜希子さんに見せたのですが、「わざわざ6面に表示する必要があるの？」と言われて、自分でも立体表示することにはそれほど重要性が無いと判断しました。そういう経過を経て出来上がった試作機なので、あまり格好よくなくて、昔のブラウン管方式のテレビのような、奥行きのある古めかしい表示装置になってしまいました」

「僕も是非一度拝見したいですね。今日の日曜日に皆の前でデモしてくれませんか？」

「わかりました」

賢は鹿島がインドから帰った週の土曜日に、マンションの部屋で試作機の検討会を開催した。亜希子と愛子は同席したが、数馬と亮子と呼ぶのは控えた。原が先ず装置の説明から始めた。表示画面の周囲には、いろいろな波長の光を照射する光収束レンズの付いたLEDが組み込まれていた。それぞれの異なった波長のLEDの光線を受けて反応する肉体の

オーラを、色温度センサーと24個のカラーCCDカメラ、48個の超短波受信装置でキャッチし、それを画像解析アルゴリズムで演算して、その結果を液晶パネルに表示させるというものだった。原は機能について説明した。

「スイッチの切り替えで、感情の起伏に反応させたり、脳波の波形に反応させたり、念波の強さに反応させたりさせて、オーラの表示サイズを拡大したり、縮小したりすることもできるようになりました。理論的には表示装置自体を膨張させたり、収縮させることも可能です。でも、当面その機能は表示オーラのサイズの変化にだけ限定することにしました。一応試作機の段階ではオーラ表示装置は完成しました。賢さん、第1段階はクリアしました。僕はこれから次の段階の試作に移ろうと思っています」

「原さん、第1段階はオーラを検出して、可視光表示するということですね」

「ええ、そうです」

「よく、短時間にそこまで出来ましたね」

「賢さん、既成のPC板機能モジュールを一杯入手して繋ぎ合わせ、少し変更を加えただけです。ここは秋葉原が近いから部品調達がスムーズです。やはり東京は便利ですね。鹿児島じゃあこうは行きませんでした。だから意外に簡単でしたよ。問題はこれからです。人が「大きくなれ」と思ったら画像がおおきくなるようにすることです。その思いの強さで大きさも変える。これは時間さえ掛ければ、いつかはできると思いますが、自分の意思でどこにでも飛んでゆくようにするという機能は、そう簡単には出来ないと思います」

「それはそうでしょう。そんなものが簡単に出来たら、この世界の常識が変わってしまいます。それにしてもあのボールは不思議でしたね」

賢の言葉に反応したように亜希子が言った。

「あのボール、もう祐子お姉さまの所に届いているのかしら？」

「この間、瞑想してテストしたとき、一瞬だったけど祐子と意識が通じたと感じたから、多分届いていると思うな……それじゃ、原さん、

マシンのデモをして頂きましょうか?」

原は装置の表示面を賢に向けてセンターテーブルの上に置き、電源ケーブルを壁のコンセントに差し込んでから電源スイッチを入れた。

12個のカラフルなLEDが表示装置の周囲を廻るように、1秒ほどの間隔で順番に点灯していった。

「賢さん、喜びの感情を表わしてみてくださいませんか?」

賢は愛子の心が安定してきていることを想い、喜びを意識の中に拡大した。愛子は前の父に接見した後も気持ちに揺れを生じなかった。むしろ一層心が広くなったように賢には思えた。賢の心に愛子への愛おしさと、喜びの感情が広がった。液晶の表示面が薄ピンク色に変化した。

「賢さん、次に悲しみの感情を出してみてください。初め弱く、そして次第に強くしてみてくださいませんか?」

賢は祐子のことを想った。祐子の居ない寂しさを感じてきた。徐々に祐子の現在の状況を思い描いてみた。心が深い悲しみに覆われてきた。表示面は初め薄紫色になり、群青色、青と変化し、水色になり、やがて灰色に変わっていった。賢の目に涙が浮かんだ。原が言った。

「ありがとうございます。大体上手く表示しているようです。」

「凄いわ。この間より、色がはっきりしているように感じる」

愛子が喜んだ。賢は、意識に祐子への悲哀の感情が残り、暫し無言になったが、一息吐いて言った。

「うん・・・凄いですね、あのボールより色がはっきり出ていますね」

その後、怒りの感情、不安の感情、焦りの感情、寛ぎの感情などを次々にテストしてみた。いずれも他の色との違いを判別できる色で表示された。試験はここまでと賢は思っていたが、原が言った。

「賢さん、副産物が出来たんですよ」

「副産物ですか?」

「はい、どうやら別次元にある人の意識を捕らえて表示できるようになったようです。偶然なのですが、CCDカメラの映像を合成して画面に表示していたとき、オーラにしては変な形をした影のようなものが顕われてきたのです。実はそれが人の影だと気付いたのです。僕の頭の中

にある人の面影があったのです。その方はオーラのことを知りたがっていた人でした。若くして亡くなったのですが、ふと「その方が居たらよろこぶだろうなあ」と想い、その方の生前の姿を思い出していた時のことだったのです。でもそれだけでははっきりとした映像は得られませんでした。そのイメージを一旦何かに転写してやる必要があったのです。その媒体に水を選びました。水は人の想念を写し取ることができると思いますのでいろいろ試してみました。そして、試行錯誤の結果、ついにその機能を盛り込むことができました。・・・今実験してみてもかまいませんか？」

「危険はありませんか？」

「それは、大丈夫だと思います。ただ、賢さんにはヘルメットを被って頂きます」

原はバッグの中から一つのヘルメットを取り出した。そのヘルメットからは沢山のケーブルが出ていて、その先にコネクタが付いている。原はヘルメットを賢に渡した。賢がヘルメットの内側を見ると、そこには水のような液体を満たしたビニールの袋のようなものが貼り付けられていた。

「まだ、試作ですから、中の水が零れないように注意して被ってください。普通に被って頂ければ零れません」

賢はヘルメットをそっと掲げて頭上にゆっくり降ろした。水が毛髪を押さえ、頭頂の肌に直接水の感触を感じた。原は一旦オーラ表示装置の電源を切り、コネクタを装置の後部の端子に接続してから再び電源を入れた。

「賢さん、どなたか亡くなった方のことを思って頂けますか？」

「一寸待ってください。その方のことを思うと、その方に意識が繋がってしまうことはありませんか？その方に悪い影響を与えなければ良いのですが」

「いいえ、それは無いと思います。ただ、その方の発している波動を一旦水に転写して、それを解読して表示させるだけですから」

「そうですか。それじゃ、愛子のお母さん、麻子さんのことを思ってみ



ます」

賢が心で麻子を思い浮かべると、オーラ表示装置にぼーっと人影が映った。

「賢さん、その方への思いをもう少し具体的にイメージして頂けますか?」

賢は麻子と歩いた奈良の長谷寺の情景を思い出した。麻子の顔をはっきりと思い描いた。すると驚いたことに画面に麻子の顔が映し出された。愛子が叫んだ。

「お母さん、お母さん・・・・・・・・」

愛子は涙を流した。そこに映っているのはまさに麻子だった。微笑んでいる。麻子は何か歌を歌っているようだ。

「賢さん、もっと麻子さんの全身のイメージを思い浮かべてください」  
賢は11面観音像の前で拝んでいる麻子を思い描いた。画面の麻子がズームアウトし、全身が映し出された。しかし、映し出されている麻子は長谷寺に居た麻子ではなかった。麻子は首からすっぽり被る白いレースのような衣類を身に付けている。あまり見掛けないポンチョのような衣服だった。麻子の姿は生前よりずっと若々しく見えた。愛子が言った

「お母さん、若返っている。お母さんは生きているのね」

賢が愛子の方を向いて言った。

「この世からあの世に移ると、自分の意識が自己の姿を決めるから、お母さんは穏やかで健康的な姿なのだろうな」

それまで、黙って見ていた亜希子が感激したように言った。

「こうして、画面で亡くなられた方を直接見ることができると、永遠の生命って本当のことなのだと思いますわ」

賢は身を乗り出して尋ねた。

「原さん、音声は出せないのですか?」

「できます。でも音声を出したほうが良いのかどうか疑問に思います。というのは、天国的に生きている方は良いでしょうが、地獄的に生きている方は聞くに堪えないと思いますから。もっとも映像も見るに堪えないものになっている場合もありますので、もしこの装置を誰にでも使え

るものにしようとするのであれば、その辺りの制約を設ける必要があるように思います」

賢も同意した。

「そうですね、魂が苦しんでいる場合は、煉獄でのたうち回っているような姿に見えるでしょうし、物質欲や食欲が強すぎる場合は、餓鬼の姿が見えてしまうでしょう。それに性欲が強すぎる場合は、他人には見せられない痴態をさらけ出す場合もあるかもしれませんし、恨みが強すぎたり、凶暴性を持っている場合は、犯罪的な戦慄を感じさせてしまうかもしれません。その辺りを考慮してこの装置を改造できませんかね？」

「人の意識のパターンは無限にあると思います。テンプレートのようなもので区分けすることは不可能だと思います。しかし、先ほどのオーラの表示信号から色情報を抽出して判別し、その情報で表示をコントロールすることは可能だと思いますね。まあ、それが一番簡単でしょうけど」

「それはどのくらいで出来ますか？」

「直ぐに出来ますよ。既成のモジュールを使って少し変更を加えるだけですから明日にでも出来ます」

「そしたら、原さん、この装置を売りに出しましょうか。この装置で、既に亡くなっている知人の現在の姿を見た人たちは、遠い過去に忘れ去ってしまった「生命が永遠であること」を、もう一度思い起こすことでしょう」

「それは面白いですね。それじゃあ一工夫して、オーラの色情報と操作者の脳波の種別で表示を ON/OFF するような機能を入れます。今度の試作は一次試作にしましょう。1週間ください」

「そんなに短期間で出来ますか？」

「任せておいてください」

1週間後に1次試作は完成した。外観も曲面を取り入れてソフトなイメージに仕上げた。その後3台の量産用試作を製品確認用に行い、型図面を作成して、型代を節約する為にシンガポールの中小企業に型発注した。いくら節約しても総額3000万円は下らない資金が必要だった。銀行からローンで借りることにした。賢はこれで総額5000万円の借金を

背負うことになった。しかし、それなりの勝算はあった。亜希子の名前で有限会社を立ち上げた。賢と原は東領製作所に勤めている関係上、会社の責任者になるわけにはいかなかった。製造現場勤務の経験のある派遣社員2名を期間契約で契約した。一連の仕事は夜間と休日だけでやり遂げた。製品の外観上の出来上がりはあまり良くなかったが、機能は驚くべきものだった。先ず原のアパートで10台を製造することにした。2ヵ月後には初ロットの10台が完成し、大人用の玩具として売り出すことにした。WEB上に店舗を開設した。ホームページも作った。新宿駅でピラ配りも行った。しかし、発表後2ヶ月間、引き合いは無かった。問い合わせも全く無かった。亜希子は一日中電話の前に居ることにした。その間、祐子を透視して状況を観察し続けた。賢も毎日出勤前と帰宅後にボールに意識を繋ぎ、祐子にメッセージを送ろうと試みた。しかしどうしても繋がらなかった。ある日の朝5時ころ賢は祐子の声で目が覚めた。確かに祐子の声だった。頭の中に祐子の声が響き渡った。祐子は悲しそうな声で語り掛けている。

「あなた、わたしはこの男に抱かれるわ。でも、意識はあなたの下に移すわ。わたしを守ってね」

賢は驚いた。「何とかしなくては」と思ったが、どうすることもできない。賢は祐子の周りにバリアを張ろうとして必死に意識を集中した。しかし、祐子に向けた意識は直ぐに切れてしまった。祐子が賢に向けた意識を継続させることができない状況にあるようだった。それから賢が何度意識を送ろうとしても、祐子には繋がらなくなった。賢は苦しかった。諦めるしかなかった。その日の昼頃、昼食を済ませてオフィスに戻る時また祐子の声が頭に響いた。

「あなた、なぜ、わたしを守ってくれなかったの？わたしはバラックに身も心も許してしまったわ」

賢は祐子が誰かに抱かれたことを知った。バラックという名前に聞き覚えは無い。それがまともな意識と愛の心を持った男であることを神に祈った。「身も心も」という言葉が脳みそに焼き付いてしまったようだった。賢は目頭が熱くなるのを感じた。祐子と離れ離れになってしまっ

いる今、祐子に起きていることが、祐子の魂を傷つけるものでないことを祈らずにはいられなかった。その日、賢は8時40分ころ帰宅した。賢の心は早朝と、昼の祐子からのメッセージで押しつぶされてしまっていた。悲しさで胸がはちきれそうだった。部屋に入ると亜希子や愛子、そして原が居た。賢は3人の姿を見ると自然に涙が流れ出した。涙を覺られないように直ぐにシャワーを浴びた。賢がシャワーを済ませて戻って来ると亜希子の心配そうな視線を感じた。

「あなた、何かあったのですか？とても悲しそうです」

賢は首を横に振った。そのとき、電話が鳴った。愛子が出た。

「もしもし、内観ですが」

「もしもし、こちらはVSBテレビのオバタと申します。新宿で配られていたビラに附いてお伺いしたいのですが……」

「はい、少々お待ち頂けますか？」

愛子は受話器の通話口を塞いで賢に言った。

「賢パパ、テレビ局の人がビラに附いて話したいって」

賢は立ち上がり、愛子から受話器を受け取った。

「もしもし、電話替わりました。内観ですが」

「こちらVSBテレビの小幡ですが、そちらが配られたビラの内容に附いて少し伺いたいのですがよろしいでしょうか？」

「はい、どういうご質問でしょうか？」

「玩具で死んだ人の映像を見ることができるといというのは、何かトリックを使ってその人の顔を写すような仕組みでやっているのでしょうか？それとも、亡くなった誰に対しても、どんな人でも映像を見られるような装置が組み込まれているのでしょうか？」

「はい、一応、お亡くなりになったどなたの姿も見ることができるようになってあります。ただし、魂が苦しんでいる方はご覧頂けないように制御はしてあります。むごたらしいですから」

「本当ですか？」

テレビ局の男は疑うような口調で言った。

「いままでそんな玩具は見たことも、聞いたこともありませんよ。もし

それが本当だとしたら、大変なことですよ。本当なんですか？」

「はい、本当です。ご購入頂くか、デモをご覧になって頂けば直ぐに分ります。」

「購入すると言っても、1台100万円もするんじゃない、おもちゃとは謂え一寸気楽には買えませんから、デモをしてもらえませんか？」

「いいですよ。デモは日曜日だけしかできませんが、それでもよろしいですか？」

「結構です。そのデモしているところをテレビ撮影してもよろしいでしょうか？場合によっては、特番で放映したいのですが・・・勿論、特番で扱わせてもらう場合は出演料を支払いますが」

「はい、それはかまいません」

「では今度の日曜日、明後日にお願ひできますか？」

「分りました。で、どこでやれば良いのでしょうか？」

「テレビ局にいらしてもらえると助かりますが、デモを行うようなスタジオがありますから」

「VSB局は確か、お台場でしたね」

「はい、ビルの5階のスタジオAにお越し頂けますか？できたら午前10時にやって頂けると、こちらとしても助かるのですが」

「結構です。明後日の午前10時にマシンを持って伺います」

電話のやり取りを聞いていた原が言った。

「テレビ局が興味を持ってくれたみたいですね。おもしろくなりそうですね」

「ええ、第1弾ですね。4人で行っていきましょう。多分、最初は我々の誰かが被験者になるでしょう。愛子、お母さんのことを思い出して、明日マシンに映し出せるかどうか試してみてくださいませんか？僕とか原さんは東領製作所に勤務しているから、直接テレビに出て説明するのは一寸まずいからね」

「分ったわ、賢パパ。明日やってみる。原さん、よろしくお願ひね」

「わかりました、愛子さん」

台場

日曜の9時50分に4人はVSBテレビ局の5階のスタジオAの入り口に来ていた。装置はダンボール箱に詰めて賢と原が運んで来た。前日に原と愛子で麻子の姿を映し出すことができることを再確認していた。

「さあ、スタジオに入りましょう」

そう言う賢はドアをノックした。中から、小幡という名札を首から提げた40歳ほどの年恰好の男性が姿を現した。

「内観さんですか？」

「はい、4人で参りました」

「お待ちしております。さあ、中にお入りください」

賢と原はダンボールを持ち上げてふたりで運び込んだ。亜希子と愛子は賢たちの後に附いて中に入った。中は広い空間になっていて、天井には沢山のスポットライトが取り付けられてあり、奥にはニュース・キャスターなどが使うようなテーブルが置かれている。テーブルには一人の若い女性が椅子に座ってコーヒーを飲んでいる。テレビカメラは3台あったがカメラマンは一人だけだった。右奥にはガラス越しに中が窺えるようになったシステム操作室があり、そこに2人の男性がキーボードを操作していた。小幡が言った。

「それじゃ、早速試験をしてみましようか」

「はい、分かりました。機械はどこに置けば良いですか？」

「重さはどのくらいありますか？」

「20キロくらいだと思いますが」

「それじゃ、あのテーブルの上に置いてくれますか？電源も必要ですね？」

「はい、よろしくをお願いします」

賢と原はマシンをテーブルの上に設置した。賢が小幡に言った。

「あの一、お願いがあるのですが」

「何ですか？」

「僕と、この原はテレビに顔を出したくないんです。職業柄、顔を放映されると不味いので」

「分かりました。少し待ってください」

そう言うと小幡は右隅にあるシステム操作室のドアを開けて中に入って行った。ガラス越しに3人が何か話し合っているのが分る。やがて小幡は出て来ると、賢に向かって言った。

「顔をマスクングすることでよろしいですか？」

「ええ、結構です」

「ところで、皆様、特に内観さんとこちらのお嬢さんはどこかで見た記憶があるのですが、テレビに出演したことはありませんか？」

「はいあります、わたくしたちは失踪事件の関係者です。こちらの愛子は昨年末に帰還して、CBSなどでインタビューに出ています。わたくしも失踪事件解決の当事者として、インタビューに応えた事があります」賢は、原と亜希子のことは紹介しなかった。

「どうりで見覚えがあると思いました。まあ、ひとつ今日のところもよろしく願いいたします」

実験は直ぐに開始された。先ほどコーヒーを飲んでいたキャスターのような女性は何も話さない。ただ、カメラマンがカメラを回しているだけだった。どうやら最初はテストのようだった。愛子が画面に麻子の姿を呼び出した。それが昨年末亡くなった母親だということを説明した為、小幡は驚愕した。一瞬顔色が青ざめたのが分った。小幡は自分もテストを試みたいと言った。小幡の父親も3年前に他界しているとのことだった。その父親を呼び出してみたいと言った。原がヘルメットのつけ方を説明し、賢が対象となる人のイメージング（映像化）の方法を説明した。直ぐに実験を開始した。一人の男性の顔が画面に映し出された。小幡は瞑目した状態でいた。カメラは回し続けられた。実験を終了すると画面の人物も消えた。小幡は眼を開けて言った。

「どうでしたか？」

賢が応えた。

「はい、男性の方が映りました。カメラさんに記録映像を映してもらっ

てください」

小幡はカメラマンの近くに行って、モニター表示装置を覗き込んだ。そして叫んだ。

「親父です！親父の奴、若返っている。本当なんですね。凄い、凄いです！」

それを聞いて、今迄黙って見ていたキャスターが言った。

「まやかしじゃなかったんですか!?! 凄いですね。すぐに本番撮りをやりますか？」

「うん、そうしよう。これは凄い反響になるぞ」

小幡はガラスの向こうでこちらを覗いて眼を剥いている男に対して言った。

「佐々木、部長を呼んで来い！説明しておいた方が良い」

佐々木と呼ばれた背丈の低い方の男がドアを開けてシステム操作室から出て来て、入り口の扉から出て行った。2分ほどすると、佐々木は年恰好50歳前後の白髪混じりの男性を連れて入って来た。男性は賢を見ると頭を下げた。

「わたしは企画室部長の富永と申します。このたびはご出演頂いてありがとうございます」

「わたくしは内観と申します。わたくしどもの装置を取り上げて頂いてありがとうございます」

「小幡、始めてくれないか、僕もビューイング（観察）させてもらうよ」  
キャスターが引き締まった顔になった。先ほど飲んでいたコーヒーのカップはもうどこかに片付けてあった。小幡は全員の立つ位置と向く方向などの注意をしてから、スタートの合図をした。

「じゃあ、行くよ、スタート」

カメラマンが、カメラを回しはじめた。

「今日は、世界で初めての実験をご紹介します。実験を行って頂けるのは、こちらにいらっしゃる4名の方々です。そして実験に使われるのはこのシステムです」

カメラがオーラビジョン・システムをアップで捕らえた。それからおよ



そ15分間実験の様子が紹介され、それが録画された。途中で咳払いや、小声の話が入り込んだが、後で修正を加えるとのことだった。先ず、オーラの表示実験から始められた。すべて愛子が被験者となった。愛子は上手くオーラを変化させた。昨日の事前テストが功を奏していた。次に死者の映像を映す実験が行われた。実験に先立って、キャスターから賢に対して質問があった。

「どうしてこのようなシステムを作られたのでしょうか？」

「はい、この世界に生きている人々に、ご自分の命が永遠に続くことを理解して頂く為です」

「そうですか。そういう話はよく聞きますが、それを実験で証明しようとするのは珍しい試みですね。それにしても、なぜこの装置を玩具として売り出されたのですか？」

「このシステムを包含できる製品カテゴリーがありませんし、我々は、この世の人間が経験する人生は天から与えられた一つの遊びのようなものだという捕らえ方をしていますので」

「なかなか哲学的な理念に基づいて製作されたのですね」

実験で紹介されたのは愛子の母親麻子と小幡の父親であった。すべての実験が成功した。キャスター役の女性が、

「この手の実験ですべて成功するのはまれなことですよ」

と言った。スタッフ一同皆満足した。水曜日の夜9時から放映する予定であると小幡が言った。部長も満足そうにしていた。4人は安堵の胸を撫で下ろしてスタジオを引き上げた。水曜日は賢も会社を早めに引き上げて帰宅した。週日で全員揃って食事をするのは久しぶりのことだった。食事が済むと亜希子がコーヒーを入れた。賢と亜希子は先ずベッドルームに入って、祐子のトレースを行った。この日も上手く祐子の意識を捉えられなかった。ふたりは諦めてソファに戻った。全員コーヒーカップを手にしたままテレビの画面を凝視した。やがてVSBの特番が始まった。

『世界を変える力を持つ、画期的な新製品の検証』という派手なサブタイトルが付けられていた。キャスターは撮影したときの女性ではなく、

男性だった。

「みなさん、今日は皆さんがびっくりして、腰をぬかすような実験をお目に掛けます。さあ、テレビの前のおじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさん、お子さまたち、準備は良いですか？そうそう、メモ用紙を用意した方が良いかもしれませんね・・・それでは早速始めましょう」

そこで画面が切り替わって、あの女性のキャスターが出てきた。

「今日は、世界で初めての公開実験をご紹介します。実験を行って頂けるのは、こちらにお越し頂いている4名の方々です。そして実験に使われるのはこのシステムです」

ここからが録画であることが分った。すべての実験の録画が放映されたが、約束どおり賢と原の顔はマスクングされていた。女性キャスターの言った「この手の実験ですべて成功するのはまれなことです」はカットされていた。小声の雑談や咳払いの音も消去されていた。実験の録画部分が終了すると、男性キャスターが言った。

「いや、驚きました。皆様もきっと驚かれたことと思います。これまでわたくしたちは、仏壇などで「ご先祖様おはようございます。今日もよろしく願います」なんて言って拝んでいましたが、それは自分の気持ちだけのことでと考えていました。ところが、こうして、現実に死んでしまった人の姿を映像で捕えることができると、もうこれは観念的なことではなくて、現実のことだと言わざるを得なくなりました。凄いことです。わたくしたちは、肉体は死んでも魂は生きていと認めざるを得ません。異論を唱える方々も大勢おられることと思いますが、一つの実験結果として捕らえて頂けたら、わたくしたちV S Bとしては大変嬉しく思います。今日は急遽5名の著名人の方々にご出席頂き、この実験結果に附いて討論して頂こうと思います。それでは出席者の方々をご紹介します・・・・・・・・・・」

最後にオーラビジョン・システムの紹介があった。賢が強く要望した為に挿入してもらうことができた。ここで聞く100万円という価格はこの番組での紹介内容から見て、決して高い値段とは思われまいだろうと

賢は思った。翌日会社に出社すると直ぐに梓がプロジェクトルームに入って来て言った。

「リーダー、おはようございます。どうしてわたくしに言ってくださらないのですか？わたくしが唯物的だからですか？」

梓はやや機嫌を損ねているようだ。

「おはよう。君にはプロジェクトがあるだろう、これ以上厄介な問題に引き込んで是不味いと思ったんだ。今はプロジェクトを達成させなくてはならない。僕がいろいろな問題を抱えているから、君にはプロジェクトの面で僕を支えていて欲しいんだ」

「分かっています。でも、わたくしは・・・悲しいです。わたくしだけ除け者にされているようで」

「決してそんなことはないよ。だけど昨日放送された実験は、当社の取り組んでいるプロジェクトのコンセプトから見ると、受け入れ難い部分を含んでいると思うから、敢えて君には伝えなかったんだ」

「リーダー、わたくしにはすべてお話して頂きたいのです。どうしてもだめなら、わたくしを仲間に入れてくれなくても諦めます。でも最低限、リーダーの行っていることは、すべて知っていたいのです」

「分ったよ。これからはすべて話すよ。君の負担が増えなければ良いけど・・・」

「負担が増えても良いのです。わたくしはその方が生き甲斐があります」

「分った。僕が悪かった」

梓が何か言おうとしたとき、ドアを開けて楠木が入って来た。楠木はここ数日仕様の詰めには奔走していた。5社の考え方に隔たりのある部分が多く、その調整に手こずっていた。財務プロジェクトから運用プロフィットセンターとして設備計画を立てるように強い要望を受けていて、この日もその部分の調整に出掛ける前に、賢に許容できる最低限の妥協ポイントを聞きに来たのだった。

「リーダー、全国に建設するバーチャル・システム館の収益の線ですが、ぼくはゼロを最低線と踏んでいます、リーダーのお考えはどうですか？」

「楠木さん、ぼくは人件費と設備償却費、経費など全部差し引いても10パーセントは載せておいた方が良いと思うな」

「でも、リーダーそれじゃ、彼らの言う20パーセントと会社上層部の考えているゼロ利益との中間になるんじゃないですか？上層部がうんと言わないと思います。それだけ利益を載せる為には今計画している設備の仕様を削らないと無理ですから」

「あのバーチャル・システム館を造り過ぎる様に思うけどね。もう少し建設地の数を少なく絞り込んだ方が良いと思うな」

「はい、そこが難しいところだと思うのですが、各都道府県に最低限1館は建てないと、地域の意識を高揚できないでしょうし、信頼度の高い統計的なデータを取得することも難しくなると思うのです」

「都道府県によっては財政的に苦しい県もありますから、行政面での支援を期待するのは難しい場合もあるでしょう。過疎化の進んでいる地域ではバーチャル・システム館に来館する人の数もそれほど期待できないと思うのです。ですから、僕は全都道府県ではなくて、HUB（接続拠点）的な要素の強い県、九州で言えば、福岡県の北九州市とか長崎県の長崎市とかに優先的に建設して、他県は段階を追って建設していった方が良いと思います。運営ができなくなると、システムも崩壊してしまうと思います」

「でも、社長はリーダーがご不在のとき、全都道府県に建設する方向で進めるようにとおっしゃいましたが……」

「そうですか、社長がそうおっしゃるのでしたら、やむを得ません」  
楠木は一応賢の意見を聞くことは聞いたが、やはり自分の考えを曲げるつもりはないようだった。社長が言っているというのは、口実のように賢には聞こえた。楠木はそのまま他社訪問の為に外出してしまった。梓はプロジェクトルームで賢とふたりだけで過ごすことになった。

「リーダー、わたくしをもう少し使ってください。まだ、わたくしの知らないところでリーダーが苦しんでいるのを知ると、寂しくて堪りません」

「それほどまでに言ってくれるんなら、梓、君に話してないことを説明

するよ。以前言ったと思うけど、僕は失踪者の調査を続けてきたんだ。その結果今回のプロジェクトに参加することになったんだけど、プロジェクトとは関係なく、失踪者を帰還させる活動も続けているんだ。以前、祐子や巫希子と一緒に遠野の失踪者の帰還を手伝ったとき、そこで不思議なボールを見たんだが、祐子の誘拐を知った遠野の帰還者の家族が祐子の救出に役立てて欲しいと、そのボールを僕に送ってよこしたんだ。そのボールは本当に不思議なボールで、人の感情の動きをキャッチして大きくなったり小さくなったりするし、命令するとどこにでも瞬時に移動できるんだ。それを祐子の所に送ったんだ。そのボールにはテレパシー通信のルーターのような機能があって、通信する者が両方とも意識をボールに向けていればテレパシーで相手と話ができる。君も一度、原さんが試作の話をしていた時に聞いていただろう。その試作品が出来たんだ。それから、試作を繰り返して漸く商品化に漕ぎ着けたんだ。我々が新宿で配った宣伝用のビラを見たV S Bのスタッフが我々にコンタクトを取ってきて、日曜日にテレビ局の人たちの前でデモを行ったんだ。それが上手くいったんで、昨日放送されたって訳だ。いままでは君に負担を掛けないように配慮してきたけど、これからは君も我々の仲間に加わってもらっても良いか？」

「はい、わたくしはその方が仕事もやり易いです」

「俺たちの仲間は少し変わっているぞ」

「はい、わたくしも意識の世界を勉強します。何時もリーダーの近くに居るのですから、直ぐに理解できると思います」

「言葉面<sup>ことばづら</sup>だけで理解しても駄目だよ。確信にまで至らないと、僕達が何をしようとしているのかも理解できないから」

「はい、努力します。大丈夫だと思います。もう、大分慣れてきました」

「はっはっはっは、面白いことを言う。慣れてきたね」

「ええ、異質なものを自分の中に取り入れるには慣れから入るのが一番手っ取り早いと思います」

「そう、確かにその通りだ。そもそも我々だって、この肉体という異質な生命体に入れられ慣らされて生きているんだからな」

「えっ？」

「いや、人間の魂は本来、このような小さな肉体に収まるようなものではないと思うんだ。それが地球という磁場を使ってうまく肉体に同化させられているんだと思う。この肉体も、地球もすべての環境も人間の魂を住ませる為の舞台装置と小道具なんだと思う」

「リーダー、難しいです」

「梓、君の頭で理解できないなんてことは無いだろう。それは唯物的なものの見方が強いからだと思うよ。それと、自我かな？」

「リーダー、今度皆さんが集うときにわたくしも呼んで下さい」

「うん、皆に一度正式に紹介するよ。覚悟しておけよ」

「誰か怖い人が居るのですか？それとも、お化けが出るのか？」

「はっはっはっはっは、梓は面白いな」

「だって、昨日のテレビで死んだ人を見えるようにした機械を紹介したのだから、「お化けも呼び出せちゃうのかな」なんて、真剣に考えちゃったんですよ」

「お化けか・・・そうだ、それは面白い。死んだ近親者ばかりじゃないんだな、生きている人も大丈夫だろうし、遠隔地に居る人も呼び出せるはずだな。要は波長を同調させれば良いんだ。原さんもその辺りまで考えているのかもしれないな。全く新しいテレビ電話ができる。配線も要らない、相手がどこに居ようと関係ない。凄いでしょ！」

「面白そうですね。わたくしも絶対協力します。試作に参加したいわ」

「原さんも喜ぶと思うよ。手が足りないからね。君のように頭の切れる人が一緒だと、原さんもやり易いだろうしね」

その日仕事が終わったのは7時少し前だった。賢は梓を連れて直接自分のマンションに帰った。

「賢パパ、お帰りなさい。誰か一緒？」

「おかえりなさい、あなた。今日はお早いお帰りですね。あら、田辺さんもご一緒ですか？・・・いらっしやいませ」

亜希子はドアの影に身を隠すように遠慮がちにしている田辺を見つけて声を掛けた。賢が梓を促して部屋に入って来た。

「今日は、良い話があるぞ。原さんも来ているかな？」

「いいえ、彼はいま取り組んでいらっしゃる次の試作を、区切りの良いところまで進められて、8時半頃お見えになるとのことですわ」

「梓、中に入って、亜希子と愛子は一寸ソファのところに来て」  
賢は梓を促してソファのところにいき全員を席に着かせた。

「実は、今度田辺さん、いや梓が我々の仲間になることになったんだ。プロジェクトは今迄通り進めるけど、梓は今我々がやりつつある、いわば新規事業にも参画してくれるようだ。それと同時に、精神的な面での仲間にもなってくれるとのことだ。じゃあ梓、一寸一言言ってみて」

「始めまして、何て言えませんね。わたくし、今迄皆さんとは違う考え方で生きてきました。もっとはっきり言えば、物質主義というか、唯物主義というかそういう理念で生きていました。しかし、皆さんの生き方に触れ、今更恥ずかしいのですが、生き方を変えようと思いました。もっと精神面に重点を置いた生き方で生きようと考えようになりました。皆さんの近くに居ると、渴いていた心に潤いが戻って来るような感覚を覚えます。仲間に入れてください。よろしくおねがいします」

亜希子が言った。

「わたくし、とっても嬉しいですわ。祐子お姉さまがおられなくなってから相談できる方が無くなってしまいとっても心細かったのです。これからいろいろ教えて頂きたいです。よろしくお願ひいたします」

愛子も喜んだ。

「わたしはまだ中学生ですから、何にも分かりません。原さんのお話が難しくとても理解できないの。田辺さんなら分かりやすく教えてくれそうでとても嬉しいです」

賢が言った。

「よし、これから梓もみんなの友達だ。梓は会社の経験が豊富だし、物事の処理能力は僕等の数倍上だ。これからいろいろ教えてもらおう。梓は今迄物質社会の物の捕らえ方で生きてきた。これからは精神世界を考慮して物事を処理してゆくことになる。次元を変えたり、消えたりすることでは君等の方が先輩かもしれないけどね」

「賢パパ、意地悪ね」

「あなた、わたくしたちにはそういう能力があるのではなくて、持って生まれた特性があると仰ってください」

「そう、ふたりは生まれつきの、そういう変わった特性をもっている・  
・・これでいいか？」

その時、ドアが開いて原が入って来た。原はソファの近くに来ると田辺に向かって言った。

「あれ、田辺さん、お見えになったんですか？」

田辺は軽く頭を下げた。賢が言った。

「原さん、朗報ですよ。田辺さんが我々の仲間になってくれることになりました。これからは一緒に行動します」

「へえー、それは凄い。じゃあ、早速次の実験では手伝ってもらっちゃおうかな」

梓が言った。

「原さん、よろしくお願いします。わたくしは原さんの考えていらっしゃる事がまだ理解できていませんが、それが現在の自然科学ベースの条件下で実証されたことで、自分の狭い考えを正すべきだと気付いたのです。リーダーの言う意識の働きも定性的なだけでなく、定量的にも扱うことができることが分りました。時間の許す限り、原さんの試作や実験に協力します」

その時電話が掛かってきた。亜希子が受話器を取った。

「はい、内観でございます」

「もしもし、あのテレビでやっていた機械は、どこに行けば買えますか？」

「ありがとうございます。都内及び近郊でしたら、設置にお伺いいたします。その時に取り扱い方法もご説明させていただきます」

「1台欲しいんです。値段は100万円でしたよね」

「はい、さようでございます」

「亡くなった方にもう一度、お会いしたいのです。できるんですよ」

「はい、使用上の注意事項はありますが、大抵の場合問題ないと思いま



す」

「じゃあ、1台持って来てください。所沢です。できるだけ早く欲しいんですが」

「少々お待ち頂けますか？配送係りに聞いてみます」

亜希子は電話を保留にして、賢の方を伺った。全員緊張して亜希子の電話のやりとりを聞いていた。賢が言った。

「土曜日に設置に行くと応えて」

亜希子は保留を解除した。

「もしもし、今度の土曜日にお伺いできますが」

「じゃあそうして。こっちは午後なら大丈夫だから。代金はその時に現金を用意しておくよ」

亜希子は電話番号を聞いてから一旦電話を切り、折り返し電話した。住所も確認した。亜希子が電話を切ると、皆一斉に声をあげた。

「やったね！」

愛子が手を打って言うと

「もう反応があったね」

原が言った。賢も、亜希子も顔一杯に喜びを表わした。梓も仲間に入らなければと思いフォローした。

「凄いですね。もう売れたんですね」

賢が言った。

「今回は僕と、原さんで行って来ます。原さん、明後日の午前中に動作確認をしておきましょう」

「ええ、僕も、今そう考えていました」

顧客第1号は西武線所沢駅から2キロほどの久米という地域にある2階建の家だった。図書館の分館の近くだと言われていたが、タクシーの運転手にそう言ってもよく分らなかった。原はマシンを大切に抱いて乗車した。賢がスマホでナビシステムの電話番号検索アプリを使って場所を確認し、漸く目的地に辿り着いた。タクシーの運転手は近くに行くのに時間が掛かり不機嫌そうだったが、賢と原は楽しかった。呼び鈴を押すと、直ぐに年恰好40歳くらいの男性が玄関に姿を現した。

「ウチミシステムズでございます。このたびはオーラビジョン・システムをお買い上げ頂きありがとうございます。マシンの設置に伺いました」  
「待っていました。さあ、どうぞ」

ふたりは8畳ほどの和室の居間に通された。原が梱包を解いてマシンを座卓の上に乗せ、電源コードをコンセントに挿すと、賢がヘルメットを取り出しケーブルをマシンに接続してから、男の頭にヘルメットを被せた。テレビで観たと言ったので、抵抗なくヘルメットを装着させることができた。賢は亡くなった人を思い出すテクニックを教えた。男は真剣に聞いていた。

「それでは、電源を入れます。両目を半眼にして、画面を見てください。お客様の意識でお亡くなりになった方を呼ぶことになりますから、画面にその方が現れても意識を他に向けしないで、その方のイメージを抱いた状態を保ってください」

電源を投入すると、男は半眼になり瞑想状態になった。やがて画面に美しい女性の姿が現われた。半眼の男の眼から涙が流れた。しかし男は姿勢も変えずじっと画面を眺め続けている。ただ、涙だけが流れている。男は時々眼を閉じ、また見開いた。画面上の女性はニコニコ微笑んでいる。突然男が口を開いた。

「秀子さん！……秀子さん！……会いたかった」

男は右手の袖口で涙を拭いた。賢が言った。

「お客様、一旦スイッチを切らせて頂きます。ご利用方法はお分かり頂けたと思いますので」

「声は聞けないのですか？」

原が応えた。

「次のバージョンでは対応するつもりです。でも、我々の世界のルールを破る可能性がありますから、同意書が必要になるでしょう」

「この、マシンもバージョンアップできますか？」

「はい。但し、有償になると思います」

「勿論それはかまいません。いくら高くても、彼女の声が聞けたらそれだけで、他のものは何も要りません」

「分りました。そのバージョンができましたら、先ずお客様にご連絡させていただきます」

男は嬉しそうだった。賢が手伝ってヘルメットを外すと、男は奥の部屋に行き、直ぐに封筒に入れた100万円を持って来て震える手で賢に渡した。賢は受領書にサインを貰うと、取扱説明書と収入印紙を貼った領収書を男に渡した。ふたりは礼を言ってその家を出た。初めての売りに緊張し続けていた原も、漸く解放されてフツと一息吐いた。

「賢さん、やりましたね。大成功です」

「原さん、見事です。凄いマシンです」

アパートに着くと亜希子が言った。

「お帰りなさい。如何でしたか？」

「亜希子、上手くいったよ。お客さんも喜んでくれた。今日は初出荷のお祝いをしよう。亜希子、はいこれ、初めての売り上げ代金」

亜希子は封筒を両手で拝むようにして受け取った。そして言った。

「あなた、原さん、驚かないでください。今日は今迄に5人の方から問い合わせを頂いたのですよ。皆さん、お求めになるおつものようでした。こちらから納期のご連絡を申し上げることに致しました」

「それは凄い。製造が間に合わなくなっちゃうな」

居間の奥から梓が出て来た。

「リーダー、おめでとうございます。凄いですね」

「おお、梓、来ていたのか。今日はパーティをやろう」

「はい、聞こえていました、リーダー」

「ところで、愛子さんはどうされたのですか？」

原が心配そうに言った。

「バレエの練習に行きました。今日は次の発表会の総練習とのことですわ。でも5時には帰宅するとおっしゃっていたわ」

梓と亜希子がふたりで買い出しに出掛けた。賢が原に聞いた。

「原さん、声を聞けるようにするというのは、可能性があるのですか？」

「はい、もう、試作は完了しています。先ほども一寸言いましたけど、相手との会話が成立してしまう危険性があるのです。そうなると、賢さ

んのおっしゃるとおり、相手の方の魂の生長を阻む危険性もあるので、そのあたりの処理がうまくできるようになったら説明するつもりだったんですよ」

「何をやっても早いですね。一度実験してみたいですね」

「ええ、賢さんなら相手の立場を考えながらできるので、心配ありませんから、今夜パーティの後で実験をやってみましょう。これから、アパートに帰って試作機を持って来ます」

原は直ぐに出て行った。賢は一人になった。誰も居なくなると、途端に祐子に会いたくなかった。先ほどの顧客が秀子という女性を呼んでその姿に涙していたとき、賢の心の中も悲しみで一杯になっていた。しかし、客の前だったのでその意識を抑えていた。これまで抑えていた意識が開放されて、無性に祐子に会いたくなってきた。意識を澄ませて話し掛けてみることにした。

「祐子、どうしている？大丈夫か？元気でいるか？」

反応は無かった。賢はもっと祐子のイメージを強く抱き、瞑想状態に入って呼びかけを続けた。微かに英語のような話し声が脳裏に展開した。

「Yes, I do. Yes, I can.」(はい、やります。はい、できます)

それだけだった。そして、少しすると、またあのクウイン・クウインという音が聞こえてきた。賢は、この音がリンク不可のサインだと認識し始めていた。この日は「Yes, I do. Yes, I can.」という肯定的な言葉が祐子から出ているという不確かな安堵感を抱くことができた。それでも大きな収穫だと賢は思った。先ず、原がダンボールに入れたマシンを抱えて戻って来た。それから間もなくふたりの女性、そしてその直ぐ後に愛子が帰って来た。全員が揃った。ふたりの女性は、いつもより値段の張る食料や酒を二袋ずつ下げていた。

「亜希子さん、重たかったわね」

「ええ、田辺さん。指に食い込んでいますわ」

亜希子はキッチンの隅に袋を置いて、中からワインのビンを2本取り出した。田辺は袋をテーブルの上に置き、そこから寿司のパックを取り出した。特上と書かれたラベルが貼ってある。

「いつもこういうパーティをやるの？」

田辺が亜希子に向かって言った。

「時々ですけど、慶びごとがあるときは皆で集まります」

「いいわね。嬉しいときは喜ぶ、悲しいときは涙する・・・生きてい  
るって感じ。わたくしはずっと忘れていたわ。嬉しいときは、「浮かれ  
ないでね」と言い、悲しいときは、「堪えましょう」と言う。そういう  
生き方になっていたわ。もう、感情の発露も子供の頃の思い出になって  
しまったわ」

賢はソファのところで原と一緒にマシンを弄っている手を休めて言っ  
た。

「梓、そうなんだ。先ず、自分自身を表現できるようにして、それから、  
自分自身を消すんだ。それが理想的な生き方さ」

梓は賢たちがそこに居ることに初めて気付いたかのように、驚いた体で  
振り返った。

「リーダー、自分自身を消すって、自我を無くすことですね？」

「梓、亜希子、お使い大変だったね・・・自我が消滅すると、全体と一  
体化した本来の自分自身が現われてくる。一寸矛盾しているようだけど  
ね」

パーティは9時頃まで続いた。愛子以外はワインを飲んだ。亜希子と梓  
は口を濡らす程度しか飲まなかったが、全員の歓喜は最高潮に達してい  
た。原が言った。

「ここらでひとつ、新しいマシンのデモをやりましょうか？」

「賛成！」

愛子が元気良く言った。賢と原はソファに移動した。女性たち3人も  
手際よく後片付けを済ませてソファに移動すると、既に賢がヘルメッ  
トを着けていて、マシンも電源ONされスタンバイ状態になっていた。

「今日はどんな実験をされるのですか？」

亜希子が聞いた。

「今日の実験は面白いですよ。霊界の人の姿を観ながら、その話し声を  
聞くのです。勿論、こちらからの話し掛けはしませんけどね」

「本当は、生きている人であっても、その人の意識がこの世界の次元を  
超えられる人なら、このマシンで捕らえられるはずなんだな」

賢が言った。梓が直ぐに反応した。

「そんなことができたら、今の無線通信は重要性を失ってしまうわね」  
「そうです。無線通信によるコミュニケーションはいずれ必要なくなる  
でしょう。このマシンでは、まだ、虚空間の情報をキャッチすることし  
かできませんが、虚・実の複合情報つまり、複素空間情報を扱えるよう  
になれば、この世界の基本的なものの考え方に変更を加えざるを得なく  
なると思いますよ」

原がそう言うと愛子が拍手をした。梓は身を乗り出して、原のほうに姿  
勢を向けた。

「原さん、そうすると、この装置では虚空間の情報をキャッチして、そ  
れを電気信号に変換しているのですか？」

「その通りです。やはり、田辺さんは理解が早いですね」

賢がそう言うと、原がにこにこしながら言った

「まあ、実験をやってみましょう」

賢がヘッドギアを付け、原が電源を入れた。賢は早速目を瞑り瞑想状態  
に入った。少しして画面に麻子の姿が現われた。ここまでは前回行った  
実験と同じである。原が表示装置の下に新たに設けたと思われるスイッ  
チをONした。マシンの横からザーザーという音がしてきて、その内に  
ピューという音に変わった。まるで昔の真空管ラジオが同調するときの  
音のようだった。歌声が聞こえてくる。聴いたことのない歌である。何  
となく風の音のように抑揚の無い単調なメロディだ。麻子の眼に涙はな  
い。愛子が言った。

「お母さん、歌っているわ。とっても楽しそう」

「空よ 透き通った空よ どこまでも続く 空よ 全てを創る空よ あ  
なたはわたし 地よ 力強い地よ 生き物たちが戯れる 地よ 全てを  
育む地よ あなたはわたし 水よ 母なる水よ 生き物たちを巡る  
水よ 全てを抱く水よ あなたはわたし 火よ 父なる火よ 草木が唄  
う 火よ 全てを生かす火よ あなたはわたし 風よ 友なる風よ 人

を愛し慈しむ 風よ 全てを運ぶ風よ あなたはわたし」

その声は澄んでいて、オペラでソプラノ歌手が歌う曲のような響きがあった。皆うっとりと聞き入ってしまった。賢が半眼になり、やがて大きく眼を見開いた。また、ピューという音になり、ガリガリ、ザーツという雑音に変わって、次第に麻子の姿は画面から消えていった。賢が言った。

「よし、これで実在性が一層はっきりと証明できる」

亜希子が一旦原の方を見てから、視線を賢に移して聞いた。

「お話はできるのでしょうか？」

原が応えた。

「理論的には可能なんですけど、この世界のルールを破ることになりますから、どうしてよいものか」

賢が言った。

「そのルールとはどういう意味ですか？」

「僕も詳しくは分らないのですが、僕が失踪しているときに訪れた星では、霊的次元と物理的次元が融合していて、ある特定の時間と場所における固体を特定することが難しいようでした。そこでは、混乱を避ける為に物理次元と霊的次元のコミュニケーションを禁止していました。役所のような場所に行かないと、それはできませんでした。一旦約束事を設けて全員がそれに同意すると、もう、自由にはコミュニケーションできないようでした。賢さんもよくご存知のように、4次元以上の次元においては、時間も空間も特定できませんから、ルールを設けているのでしょう。これが仕組つまり、4組の状態です」

「なるほど、そういうことですか。コミュニケーションを自由に行うと、その場に時空のズレが生じる可能性があるのですね。フィラデルフィアの失敗のようなことが起きる可能性があるのですね。分ります。それに、人間が生きる目的としている魂の霊的生長を阻む危険性もありますからね」

「ええ、その通りだと思います。ですから、特に神智学で謂うコーザル体にある存在への働き掛けは、感応だけなら大丈夫でしょうが、コンタ

クトは避けたほうが良いと思われるのです。恐山でやっているようなエーテルレベルの働き掛けならさほど問題ないでしょうけどね」

「原さん、その通りだと思いますよ。僕も麻子のように精神レベルが向上している魂への呼び掛けは、避けるべきだと思います。でも、もし次元の深さが検出できれば、高次の魂に対してはコンタクトが取れないようにフィルターを掛けられるのではないのでしょうか？」

「はい、それは可能です。実は、その機能はもう入れてあります。でも、このマシンを販売するとき、バージョンで段階的に価格を変えた方が良いと思いますから、現在はその機能は隠し仕様にしておこうと考えています」

梓が言った。

「わたくしも原さんに賛成です。次元のフィルターの話は理解できていませんが、ビジネスとしては、今言われたようにしたほうが成長路線をとり易いと思います。例えば、オーラだけなら50万円、オーラと人の姿で100万円、声も聞けると200万円、会話ができると300万円とか……」

「随分具体的だな。でも、フィルターが掛けてあると、話せない人も出てくるはずだな」

「ええ、その時は割引価格を適用するとか……」

「やはり田辺さんはエリート企業のエリート社員ですね。直ぐに具体的な商売の話に展開できる。我々も助かりますね。賢さんだけじゃ、兎角利益のことを無視しがちですからね」

賢は笑った。亜希子も頷いた。

「賢パパ、それじゃ、お母さんとは話せないわけ？」

「うん、その方がお母さんの為になるんだ。愛子、我慢しなさい」

「はい」

賢は愛子が随分素直だと思った。パーティは9時半過ぎにお開きになった。原はマシンを抱えて、自分のアパートに帰って行った。梓は自分ももう賢のファミリーの一員になったような気がしていて、アパートに戻りたくなかった。誰も何も言わないので、もう暫らくそこに居座ること



にした。

「賢パパ、今日ね、発表会の練習があったでしょう。その後でね、先生がわたしを呼んで、今度一度賢パパに会いたって言ったの。わたしのことらしいわ」

「そうか、こちらから伺ったほうがいいかな？」

「ううん、先生が後で電話するって言ってた」

「そうか、愛子、何か先生に叱られるようなことをしたんじゃないか？」

「賢パパ、いやね、わたしは優秀だって先生が言っていたわよ」

「はっはっは、そうか、それじゃ良い話だな。よしよし」

「いやね、賢パパったら」

「愛子さん、どんなお話かしらね」

梓が言った。

「どんな話かな？愛子、見当が付くか？・・・そうだ、梓、そろそろ帰らなくても大丈夫か？」

「リーダー、もう暫くここに居させてください」

「分った、ところで、そのリーダーっていうのは止めないか。ここに居るときは名前を呼んでくれないかな？その方が、より身近に感じるだろう」

「はい、そうします。りー・・・内観さん・・・なんかしっくりきません」

「賢でいいよ」

「はい、分かりました。賢さん・・・何か、恥ずかしいです。恋人みたいで・・・」

恋人という言葉聞いて、亜希子が梓の方を振り向いた。

「田辺さん、心配なさらなくても大丈夫ですわ。賢さんにはわたくしと祐子お姉さまが伴侶としておりますから」

梓は頷いたが、何も言わなかった。その時電話が鳴った。賢が出た。

「もしもし、オーラビジョン・システムを販売されている会社ですか？」

「はい、そうです。わたくしは内観と申します。」

「あの、もしかしてわたくしたちを救ってくださった内観さんですか？」

「あの一、どちら様でしょうか？」

「大河原です、青森の」

「ああ、大河原さん、久しぶりです。お元気にされていますか？」

「はい、おかげさまで、元気しております。やはり、あの放送は内観さんたちでしたのね。亜希子さんが出ていらっしやっただから、顔がマスクングされている人の内のお一方が、内観さんじゃないかと思いました。お懐かしいです・・・あのう・・・わたくし、主人とは別れました。今、竹下さんと一緒に居ますの。彼は会社を辞めて、青森に移って来ました。わたくしがどうしても青森を離れられなかったのだから」

「そうですか。でも、愛する方と一緒に生きた方が、人生が喜びに満ちて充実しますから、良かったですね」

「はい・・・でも義母と娘たちのことは一生供養し続けたいのです。それがわたくしの務めですから・・・それで、お願いなのですが、あのテレビで放送されたマシンを一台分けて頂けないかと思ひまして・・・」

「お義母さんと娘さんたちにお会いになりたいのですか？」

「はい、竹下さんが帰還したときは、内観さんが居てくださったので、わたくしの心も安定していましたが、あれからまた悲しみが段々大きくなってきて、毎日がとても辛いのです。あのテレビで放送されたマシンがあれば、義母や娘たちの命がずっと続いていることを目の当たりにできて安心できると思うのです。それに、娘たちの姿をもう一度見たいのです。勿論、声も聞けたらもっと素晴らしいのですが、そこまで贅沢は申しません。姿が見えるだけで、もうすべての私財を投げ打っても良いと思っています。竹下さんもそうしたほうが良いとおっしゃっています。なんとか1台譲って頂けないでしょうか？」

「分かりました。1台用意いたします。10日ほど待つて頂けますか？声が聞けるマシンをお渡しできると思ひます」

「えっ？義母や娘たちの声まで聞けるのですか？それは凄いです。代金はお幾らになりますか？」

「代金は結構です。わたくしがお伺いして、設置いたします」

「いいえ、そうは参りません、代金はきちんとお払いいたします。テレビでは100万円と仰ってましたけど、声も聞けるとなるともっとお高いのでしょうね」

「本当にお支払い頂けるのですか？・・・まだ、声のバージョンの値段は決めてないのですが、200万円にしようと思っています。でも、お金が大変ですから・・・」

「いいえ、お支払いいたします。ローンでよろしいでしょうか？」

「じゃあ、こうしましょう。今回は無料で貸し出しいたします。心が安定してきたら、お返し頂くということでは如何でしょうか？」

「そんなにさせて頂いてもよろしいのでしょうか？」

10日後の日曜日に賢が青森まで持参することになった。マシンはそのまま貸し出して、1ヵ月後に返却してもらうことになった。賢はどうしても料金は受け取らないと言った。電話を切ると梓が言った。

「リー、・・・賢さん、商売に私情を挟まないほうが良いと思います。今の方たちはたまたま賢さんがお助けになった方々ですが、これからマシンを購入される方々も、それぞれに辛い事情をお持ちの方々だと思うのです。その都度同情していたら、商売として成り立たないと思います」

「梓、僕にも分かっているよ。でも、どうしてもそうしたいんだ。今の経済の仕組が悪いんだ。何でも金に換算しなくてはならないという制度が社会に歪をもたらしているんだ。今の彼女たちには、支払う力は無いよ。本当は早苗さんの心の苦しみは、自分自身で改善してゆくしかないと思うんだけどね。そんなことを言っても、なかなか自分で自分の心をコントロールすることは難しいから、マシンが少し背中を押してやる。素晴らしいじゃないか。それに、あの亡くなられたお義母さんと娘さん達はまだそれほど高い次元に上っていないと思われるから、フィルターにも掛からないだろうしね」

「リーダーの、いえ、賢さんの優しさじゃ、それが結論になるんでしょうね」

「うん、僕には、湧き上がる感情を抑えて、機能を金額に換算することなんてできないんだ。だから、このマシンの販売は僕と原さん以外の誰

かに担当してもらわないと、商売にならないだろうね。例えば、梓、きみとか」

「わたくしも、参加させてもらえるのですか？」

「うん、頼むよ。だけど、会社の仕事との両立が難しいかもしれないけどね……」

「ええ、勿論100パーセントは無理ですけど、できる限りの協力はさせていただきます」

その時また、電話が掛かった。愛子が出た。

「賢パパ、バレエの先生からよ」

賢は愛子から受話器を受け取った。

「もしもし、内観でございます。愛子がいつもお世話になっております」

「雲井小夜子です。愛子さんのお父さんでいらっしゃいますね。実は今ね、ロシアに留学する学生を募集しておりますのよ。ご存知でいらっしゃいましたか？」

「いいえ、初耳です」

「あら、愛子さんからは何もお話なさらなかったのかしら。それでね、愛子さんが高校に進学されるときに、あちらのバレエスクールに留学されては如何かと思いましたの。それで、お電話させていただきましたの」

「と、おっしゃいますと？愛子はロシアでバレエを学んだ方がいいとおっしゃるのですか？」

「ええ、愛子さんには可能性がおありになりますから、わたくしとしても是非そうされたほうがよろしいと思ひまして……」

「ありがとうございます。それは愛子にとっては大変結構なお話ですが、愛子とも相談してみたいので、少々考えさせて頂けますか？お返事はいつごろまでに差し上げたらよろしいでしょうか？」

「まだ大丈夫ですわ。秋口まで受け付けてくれると思います」

横で愛子が、ニコニコして覗き込んでいる。電話を切ると賢は言った。

「愛子、今の話、知っていたのか？」

「うん、ポスターが貼ってあったから」

「僕に相談すればよかったのに」

「ううん、わたしはね、賢パパや原さん、そして亜希子さんたちと離れたくなかったの。それにお金も掛かるらしいし……」

「お金はなんとかなるよ。それより、そうしたいかどうかが鍵だよ」

「そうしたい！……だって、ロシアはバレエの本場なもの。みんな憧れているのよ。試験にパスしないと受け入れてもらえないらしいの」

日に日にマシンの販売台数が増加してきて、発売から1ヶ月経過した頃には、受注数が日に100台を超えるようになった。もう、亜希子と2名の派遣社員だけでは業務をこなせなくなってきた。既に受注残は2900台に登っていて、量産体制を敷かざるを得ないところまで来ていた。問題は製造だけではなく。販売支援、設置、保守サービスも必要になってきていた。原は既に派遣会社を退社していて、自宅で設計と試験に明け暮れていた。愛子とのバレエのレッスンは唯一の息抜きになっていた。賢は、依然として東領製作所でMIプロジェクトに取り組んでいた。しかし、土、日は量産の為に工場の借用、設備の導入、人材確保、雇用契約などのために東奔西走せざるを得なかった。賢は特に人材の確保に注力した。賢が前の会社を退社したときに新規事業に参加させてほしいと言っていた榎田雄三や、その他の可能性のある友人たちなどにも声を掛けた。榎田は事業の内容をよく理解できないようだったが、賢を信じると言ってくれた。努力した結果、賢は7人の若い精鋭を集めることができた。工場は小作にある倒産して売りに出ているPC製造会社の物件を、製造機器付きで借用する契約を結んだ。そこはもともと大手電機メーカーの電子モジュールの組み立てをしていただけのことがあり、PC板組み立てや検査の為に設備がそのまま残っていた。賢たちにはまだ工場を買い取るだけの資金力が無かった。その上、今後どう展開するか不定だったので、不動産会社と交渉してそこを借用することにした。そのような多忙な毎日の中でも、賢と亜希子は毎朝・夕、祐子へのチャンネル確立の為に瞑想は欠かさなかった。この一月の間に祐子とは10回ほどコンタクトできたが、祐子がボールの機能を理解していなかった為に対話がどちら側からも一方通行になり、コミュニケーションは成立

しなかった。祐子は自分の話し掛けた会話に賢からの応答があるとは思ってもいなかったし、賢が話し掛けているということを想像もしていなかった為、積極的に聞こうとする意識を働かせることはなかった。賢は、一度瞑想中に祐子に出会ってから、「祐子は元気である」という妙な安心感が出来上がってしまっていた。巫希子が悲惨な状況を透視したときも、祐子だけは安全だと思い込んでいた。その感覚がどこから来るのか自分でも分らなかったが、いずれにしても祐子が危険地帯に居ることに違いはなかったので、自分の抱く感覚に違和感さえ覚えた。原が派遣会社を退社してからは、それだけでなく人の10倍も速いペースで行っていた開発のスピードがさらにアップした。既に新しいマシンには対話の機能まで組み込まれていた。対話をする為には、大きなハードルがあった。それはこちらの意図を相手に伝えることである。違う次元に居る存在に対してこちら側の意思を伝えることは至難の業だった。最低でも共振波の第3高調波までの成分を拾い出す必要があった。S/N比を気が遠くなるほど高くしなくてはならなかった。原は、そこが一番難しい部分だと言った。入力信号は脳波だけでなく、眉間にあるアジナチャクラの振動を検出する必要があった。その為、ヘルメットの形状変更が必要だった。また、霊的波動の弱い人の場合は補助信号として、胸にあるアナハタチャクラからの信号を検出して入力する必要もあった。またこちらの言葉が相手に伝わらない場合は、マイク信号だけでなく、喉のビッシュダチャクラからの信号も使った。従って、相手と話すときは喉や胸から配線が出ていて、まるで、生体実験をしているような形になってしまった。原はそれらの補助入力は、いずれ、志向性の強い受信アンテナをマシンに付け、S/N比を更に向上させることで、配線を取り去ることができると言った。しかし、その為には特殊なバイオプラスチックの材料を見つけなくてはならないとも言った。この説明にはさすがの梓も附いて行けなかった。原の必死の研究開発の結果、賢のマンションの部屋での実験で賢が麻子と話をすることができたときは、全員感激を超えて、驚愕の境地に陥った。それはこの世界の歴史が始まって以来の出来事だったからである。

賢は麻子の霊的な意識に影響を与えないように最大限の配慮をしながら画面に映っている麻子に向った。麻子は歌を唄っていた。賢が話し掛けると麻子はきょろきょろと辺りを見回した。明らかに賢を探しているようだった。麻子は目を瞑った。麻子の顔に微笑が現われてきた。

「麻子、元気にしているか？」

「ピーピー、ザーザー、ガリガリガリ、あなた、どこにいるのですか？」

「まだ生きているから、君とは別の世界に居るよ。君が生きていたときの世界だ」

「ザーザー・・・あなた、愛しています」

この言葉で、傍観していたもの全員の顔つきが変わった。賢は、喜びに涙ぐんだ。亜希子は伏し目がちにした。梓は賢の方をじっと見つめた。愛子は嬉々とした表情になった。原は耳を澄ませ、大きな目を更に大きく見開いて画像を注視した。それは、それまでの言葉に比べ「愛しています」だけがはっきりと、麻子が今この場に居るように響いた為でもあった。臨場感があつた。

「麻子、どんな生活をしているんだ？」

「毎日が創造、毎日が感謝、毎日が歌、毎日が瞑想、毎日があなたへの愛、そして、創造神への愛です。これ以上の幸せはありません」

「天国に居るのか？」

「そういう場所じゃないと思います。固定した場所はありません。自分の意思でどこにでも存在できますし、どんな自然も、どんな家も、どんな食べ物も現われるのよ。あなたがこちらにいらっしゃるのを楽しみにしているわ」

「まだ、行かないよ」

「いいえ、もう直ぐいらっしゃいます。こちらの1日はそちらの1年ですから。せいぜいあと半年も待てば良いのよ。もともと、それもわたしが決めたのですけれどね」

「そうか、麻子は今そういうレベルに居るんだね。それは楽しいはずだ。あまり長く話すと君の為にもよくないから、もうこの辺りでお別れだ。直ぐにまた会いたいなんて思うなよ。普通の生活に戻ってくれよな」

「はい、わたしはあなたに会うのは楽しみですけど、執着は持っていませんから大丈夫です。あなた、愛子は元気ですか？」

「うん、元気だ。ここに居るよ。バレエを習い始めたよ」

「あなた、ありがとうございます。それで、前の夫はどうしていますか？」

「いま刑務所に居るよ。彼のためにも祈ってあげてくれよな」

「はい、毎日お祈りしています。安心しました。では、お元気で」

賢以外の誰もが目の前で起きていることに、我を忘れて引き込まれた。賢がマシンのスイッチを切ったとき、初めて全員我に返ったようだった。

「お母さん、本当に生きているのね」

愛子は目に一杯涙を溜めている。

「わたくしは、今までの自分の考え方を根本的に変えなくてははいけないと分りました。賢さんに言われて、精神世界の重要性は分ったつもりでしたが、やはり、つもりはつもりです。今日実際に体験してみて、現在の科学の遅れをはっきり自覚しました」

梓が言った。亜希子は複雑な気持ちだった。

「麻子さんは、これほどまでにあなたを愛していらっしゃるのですね。わたくしは負けてしまいそうです。いいえ、わたくしは永遠にあなたを愛し続けます」

「亜希子、それは僕じゃなくて、全ての人であるはずなんだ。僕に向けている愛情をすべての人に対して拡大することだ」

「はい、拡大しますが、でもあなたに対しても更に拡大します」

賢はもう、何も言わなかった。原が説明するように言った。

「賢さんは霊界のことも分かっているから、こういう会話ができるのですけど、一般の人の場合は、直ぐに「会いたい、抱き締めたい」なんて言って、相手に執着の気持ちを起こさせたり、「あなたの大切にしていた盆栽は大きくなりました」何て言って、物質欲を助長したりしてしまいますから、あるレベル以上の次元に存在している人に対しては、フィルターを設けて簡単にはアクセスできないように制御してあります。もっとも、低い次元におられる方々はこちらの言葉にも反応し易いので、本当はそういう人に対しても注意が必要なんです」



「今の注意事項は亜希子が取説に書き込んでくれたけど、別冊でアクセスガイドなるものを作った方が良いかもしれないな」

「ええ、僕もそう思います」

それから10日後の日曜日、賢は亜希子とともに大河原家を訪れていた。梓も来たが、賢が、「竹下さんの帰還のときに亜希子と一緒に訪れているから、相手のことも考えてふたりで行きたい」と言ったので諦めざるを得なかった。

「あの時は寒かったですわね。わたくしが雪の上に尻餅を突いてしまって、コートもすっかり濡れてしまって、からだが冷たくなってしまいました。あなたは優しかったわ。わたくしをととても大切にしてくださって」  
「亜希子はテレポーションして来たから、パジャマのままだったな。俺のだぶだぶの服を着て、腕白な子供のように可愛かったよ。あの時は凄く寒かったな」

「ええ、本当に寒かったですわ。一度震えがくると、なかなか止まらないのですね・・・またあのときのようにふたりきりで居られるのですね」

「うん、あの時も祐子と一緒にじゃなかった・・・」

「ええ・・・そうでした」

正午を廻った頃早苗の家に着いた。早苗と竹下と一緒に玄関に顔を出した。ふたりは夫婦のような自然な雰囲気漂わせていた。

「遠いところをわざわざいらして頂いて、ありがとうございます。さあ、どうぞお上がりになってください」

賢は段ボール箱を抱えて床に上がった。亜希子は賢の靴を揃えてから、框に腰掛けて片足ずつ靴を脱ぎ、床に上がってから屈み込んで靴を揃えた。ふたりは居間に通された。賢が「仏壇に線香を上げたい」と言うと、早苗が仏壇の蠟燭に火を灯してくれた。仏壇には羊羹とメロンが供えられていた。

「子供たちが、メロンが好きだったもので・・・義母は羊羹が好物でした」

尋ねもしないのに、早苗がうつむき加減に言った。この間ここを去った

ときの明るさは消えていたが、苦しみのイメージは無い。賢は早苗の身体全体から悲しみが滲み出ているような感じを受けた。賢はなぜ早苗が大河原家に住むことができたのかを敢えて訊かなかった。テーブルに戻ると、早苗が茶を入れてあった。竹下は既に縁側の方を向いて座っている。賢と亜希子は座卓の長手方向に縁側を背にして並んで座った。

「内観さん、亜希子さん、僕たちを救ってくださってありがとうございました。そして、また僕たちのために、こんなに親切にして頂いて何とお礼を申し上げて良いか分かりません」

早苗が隣に座ると、直ぐに竹下が言った。

「いいえ、少しでもお役に立てたら本望です」

賢が応えた。

「ご無沙汰しております。また、わたくしも附いて来てしまいました」

亜希子も挨拶をした。

「ようこそおいでくださいました。漸く寒さも遠のき、こちらは本格的な春になって参りました。お時間があればどこかご案内いたしますが・・・」

竹下が言ったが、賢は翌日プロジェクトのステアリング会議があった。

「ありがとうございます。でも、今回は直ぐに戻らなくてはなりません。また、機会を見て、ゆっくりお伺いいたします」

「それは残念です。内観さんたちは失踪事件を調査されていらっしやっただしょう。同じような失踪事件がこの青森県内にもありまして、その失踪事件が解決したので、今日は桜も満開ということで、そこで祝賀パーティーがあるのです。帰還した方たちが何か出し物を披露してくれるようです。少しだけなら、是非そちらに寄って行かれたらよろしいかと思うのですが・・・」

「はい、ありがとうございます。時間がありましたら、是非寄らせて頂けたらと思います・・・それでは、早速準備に入りましょう」

賢はマシンを段ボール箱から出すと、手際よく準備をし、早苗の頭に改造したヘルメットであるヘッドギアを取り付けた。早苗が言った。

「何か、このヘルメット、ムーア真理教のヘルメットみたいですね」

「大丈夫ですよ。脳波を調べているだけですから」

賢は先ず早苗の不安を取り除き、イメージングの方法を一通り説明してから、マシンのスイッチを入れた。画面には何も映らない。賢は早苗に順を追って説明していった。

「早苗さん、3人一緒にイメージしては駄目ですよ。先ほど説明したように一人一人です。画面に姿が現われても、あまり感情的に反応しないでください。意識の照準が変わってしまっ、直ぐに消えてしまいますから。そして、映像が安定したら、竹下さん、このスイッチを押してください。記憶された脳波で同調を続けますから。では、先ずお義母さんから呼んでみましょうか？」

「はい」

早苗は姿勢を正して、マシンの画面に向かって半眼になった。

「では、いいですか。半眼になったら、先ずお義母さんの姿を思い浮かべてください。ほかの事は一切考えないで、集中して思い浮かべてください」

画面に年老いた女性の顔が映し出された。早苗の顔が歪んできた。眼から涙が流れ落ちた。早苗は今にも号泣しそうな表情に変わってきた。竹下が賢に言われたスイッチを押した。早苗は我慢しきれずに声を出して泣き崩れた。

「お義母さん、ごめんなさい。わたしが悪かったわ。ごめんなさい」

竹下が早苗の背中を摩っている。賢が言った。

「早苗さん、そんなに悲しまないでください。感情が高ぶると、お義母さんとお話ができませんよ」

早苗はすすり上げながらも、必死に冷静に戻ろうと努めているようだった。義母の顔は穏やかで微笑を浮かべている。その時、何かを口に持っていったように見えた。食事をしているようだ。おいしそうにニコニコしながら口を動かしている。漸く、早苗の感情も平静に戻ってきた。賢は音声のスイッチを入れた。

「ピーー、ガリガリガリ、ザー、・・・おいしいわねこれ。もっと頂けるかしら・・・そうだ、いとさんにもあげよう」

食事をしているところのようだった。

「お義母さん、お義母さん……」

早苗が呼び掛けた。賢が言った。

「今は、まだお義母さんに、こちらの声は届いていません。暫く様子を窺っていきましょう。お母さんの食事が済んだら、話し掛けてみましょう」  
どうやら義母は食事をしているのではなさそうだ。菓子を食べているようだった。次の一口の後、もう何かを食べた雰囲気はなくなっていて、何かに耳を傾けているような様子に変わった。まるで指揮でもしているように右手を振って、歌を唄い始めた。現在ではもう、滅多に聞かないような古い歌だった。

「あかいらんごにくちびるよせて、だまあってみているあおいそら、りんごはなんにもしらないけれど、りんごのきもちをよくわかる、りんごかわいや、かわいやりんご」

気持ち良さそうに歌っている。賢は早苗に話し掛けるように合図をした。早苗が画面に向かって話し掛けた。緊張で顔が引き攣っている。

「お義母さま、わたくし、早苗です。聞こえますか？」

義母は気付かない。歌を唄い続けている。

「お義母さま、お義母さま、陽一さんの嫁の早苗です。分りますか？」

義母は唄うのを止めた。辺りをきょろきょろ見廻している。

「誰、陽一なの、どこにいるの？陽一！」

「わたくしです。嫁の早苗です。お義母さま」

「えっ？ あの早苗さん、わたしたちを苦しめた人ね、陽一のことを騙して他の男に走った嫁ね……変ねえ、姿が見えないわ」

周囲がまるで夕暮れのような雰囲気になってきて、早苗の顔もやっと判別できるほどの暗さになった。「ガガガガ、ザーザーザー、ピューピュー……ああ、寒い、嫌ね、急に寒くなって来たわ。ガリガリガガガ……わあっ！今のは何？怖いわ。地響きがする。誰か来るのかしら!?怖いわ。ああ、神様助けてください！ああ、神様！」

賢はまずいと思った。義母の意識の波動が不規則になって、マシンが捕らえにくくなってきていた。

「お母さんの意識が光を失ってきている。エネルギーを入れなくてはまずい。地獄的な波動になっている。暫く中断しましょう」

そう言う賢はマシンのスイッチを切った。義母については、暫く時間を置いてから再度トライすることにした。早苗は深い溜息を吐いた。「わたくしがいけないのです。声を掛けなければよかった。母を暗い思いにしまって・・・」

「そう、これが一番の懸念材料なのですよ。でも、大丈夫でしょう。少しすれば元に戻りますよ。お義母さんは外からの刺激で直ぐに精神の不安定な状態に陥るようですから、コンタクトを取るときは注意が必要です。生きておられるときに随分精神的な葛藤があったんでしょうね」

「母は優しい感じの方でしたが、やはり心の中ではわたくしのことを許せなかったのですね。わたくしが暴力団の男、栗原に弄ばれていたことを知っていたようです。亡くなった後もわたくしを拒否しているのですね」

「普通、記憶は消えてしまうのですが、感情があまりにも深く意識の底に根を下ろしていると、記憶を呼び起こされたとき、その感情も同時に浮き上がって来るんだと思います・・・暫らくしてから、別のアプローチを試みましょう。お義母さんにアプローチするまでの間、娘さんたちを見てみましょう。それでは早苗さん、娘さんを一人ずつイメージしてみましょう」

そう言う賢は再びマシンのスイッチを入れた。いつもの雑音に続いて、少女の顔が画面に映し出された。早苗によく似た顔立ちである。ニコニコ笑いながら、何か話しでもしているように口を動かしている。

「セリ、セリちゃんね・・・会いたかった。お母さんを赦して・・・」

早苗は泣き崩れた。激しく泣いたとき、マシンのノイズが大きくなり、一時画像が消えた。竹下が早苗にハンカチを渡し、軽く背中に手を回した。早苗は竹下の方を向いて涙を拭くと、深呼吸をして姿勢を正し、画面と向き合った。再びセリの顔が画面に映し出された。賢は音声受信のスイッチを入れた。ノイズの中に少女の声が聞き取れるようになってき

た。

「ガガガガ・・・お母さんはね・・・とっても優しいのよ。おやつも作ってくれるし、お布団の中ではね、お話もしてくれるのよ」

早苗の頬を涙がとめどなく流れている。竹下のくれたハンカチも涙を含んで、心持ちやわらかくなっているように見える。

「わたしね、お母さんのこと、世界中でいちばんすき」

「ううっ・・・セリ、セリー・・・」

「早苗さんの激しい感情の波が収まったら、お嬢さんと会話ができるように切り替えます」

賢が言ったが、早苗はなかなか泣き止まなかった。

「ワコ、先生の言うことを聞かなくては駄目よ。お母さんが留守なんだからね。良いわね・・・」

竹下が一生懸命早苗を気遣ってなだめていた。

「ねえ、トントちゃんの唄、歌いませよ・・・ト、ト、トントちゃん、きょうははれ、あ、あ、あさから、おでかけよ。ト、ト、トントちゃん、きょうはあめ、ひ、ひ、ひるまで、しゅくだいね。ト、ト、トントちゃん、きょうはゆき、お、お、おこたで、あそびませよ・・・」

「あら、変な唄」

漸く早苗の涙が止まった。賢はマシンの対話のスイッチをONした。早苗は大きく息を吸った。

「セリ、セリちゃん。おかあさんよ」

「お母さんの声がするわ・・・ううん、わたしには聞こえるの。ほらわたしを呼んでるわ」

「セリ、お母さんは遠くにいるのよ。あなた、元気であるかしら？」

「ほんとよ、お母さんの声だわ。ワコ、耳を澄ますのよ・・・可笑しいわね。わたしには聞こえるのに・・・」

「内観さん、2人同時には話せないのですね」

「はい、ひとりずつしかできません。では、もう一人の娘さん、ワコちゃんですか？イメージしてみてください。ワコちゃんだけをね」

早苗は暫し瞑目していたが、やがてセリの映像が消え、別の少女が映し

出された。ワコは見るからに小柄な少女だった。顔立ちはあまり早苗には似ていなく、丸顔で二重脣だった。真剣な顔をしている。声が聞こえてきた。

「ガガガガ・・・おねえちゃん、どうやったらお母さんの声が聞こえたの？」

「ワコ、ワコちゃん、お母さんよ。お母さんの声、聞こえる？」

「あつ、お母さん、おかあさん。お姉ちゃん、わたしにも聞こえた。ねえ、お母さんどこにいるの？ねえ、出て来て？わたし、寂しいのよ。おばあちゃんもいなくなっちゃったし、皆どこかに行っちゃったのよ。おかあさん、出て来てね。おりこうにしているから、ねえ、一緒のお布団でねんねしたいの」

早苗の眼から涙が溢れ出してきた。早苗は口を押さえて、嗚咽を堪えた。話をする事ができない。

「お姉ちゃん、また、お母さんの声、聞こえなくなっちゃった。変だなー。さっきは聞こえていたのになあ・・・お姉ちゃんも聞こえないの？変だなー」

「早苗さん、冷静になって、今日は優しい言葉を掛けてやってください。彼女たちは亡くなっているのです。違う次元にいるのです。娘さんたちに、あなたが近くにいるような感覚を抱かせてはいけません。まだ自分たちが亡くなっていることを認識していないのです。誰か別の存在の意識が教えると思いますが、なかなか理解できないのでしょう。1年以上経っても理解できていないんです。あなたは、事実を優しく諭してやることから始めたほうが良いと思います」

早苗は漸く落ち着いてきた。

「取り乱して、済みませんでした。わたくしがこの機械を使わせて頂いて、あの子達を指導します。ワコから始めてみます。」

「今日は、十分な時間がありませんから、今はとりあえず優しい言葉を掛けてやるだけに留めましょう」

早苗は先ず、ワコに対して話した。「ワコちゃん、お母さんはワコちゃんがだい好きよ。またこの次に、おはなしをしてあげるから、それまで

元気にすごすのよ」

「おかあさん、分ったわ。わたしおりこうにしているから、また、来てね。わたし、待ってる」

早苗はセリにも話した。

「セリ、あなたはおりこうね。お母さんはセリのことがかだいすきで、自慢よ。ワコのことをよく面倒を見てくれているのね。お母さんは、用事があるって、今はあなた方には会えないのよ。だけど、その内に会えるようになるから、お利巧にしているね。また少ししたらお話はできるわ。楽しみにしているね」

「おかあさん、わたし、がまんするわ。本当にまたお話に来てね」

そこで賢はマシンのスイッチを切った。

「あの娘たち、自分が死んでしまったこと知っているんじゃないかしら？  
だって、素直に言うことを聞いたでしょう」

「多分、魂はすべて分かっていると思います。生前の子供としての意識がまだ死を認識していないのでしょう。今はまだ、その意識で生きているんじゃないからね」

ここで早苗が茶を入れ直すために台所に立った。竹下が言った。

「死んでも、生きているんですね。今まで、宗教家や神秘家が唱えてきたことが真実なのだということが分かりました。これは画期的なことですね。亡くなった人に会った人はもう、誰でも皆この人生の出来事に執着しなくなるんじゃないでしょうか？」

「本当はそれもまずいと思います。人間は執着を通して、物事を達成させてゆきますから、執着が完全に無くなると、もうこの世界に生きる必要もなくなると思うんです。そうするとこの段階での魂の発展もなくなってしまおうでしょう。何かをやり遂げたい、何かを手に入れたい、これが自分自身を磨き上げてゆくやすり鑪の役目をしているんだと思います」

「そうなんですね。このマシンの使い方はなかなか難しいです」

「ええ、そう思います」

30分ほど歓談していたが、賢は早苗に義母とのコンタクトはもう少し日を置いて行った方がよいと進言した。



「早苗さん、お義母さんの意識は他からの影響を非常に受けやすいのが分ったと思います。ですから、毎日、短い時間で良いですから、お義母さんに愛の気持ちを送ってください。1ヶ月もすれば、お母さんの気持ちも安定してきて、あなたの言葉を受け入れることができるかもしれません。1ヶ月というのも、あちらの時間ではどのくらいになるのか判断できませんが、あなた自身がお母さんに打ち解ければ、お母さんも同じようにあなたを受け入れると思います。あなたの心の動きが鍵ですから、こちらの時間で考えて良いと思います。もともと、すべての人の意識は繋がっていますからね。自分が変われば相手も変わるんです。特に死後の世界は、意識のみの世界ですから、愛することがもっとも大切なんです」

賢と亜希子はマシンの使い方と、操作時の注意を早苗と竹下に詳しく説明してから、午後3時過ぎに大河原家を出た。義母との交信は上手いかなかったが、早苗は娘たちの姿を目にし、話をする事ができたことで心の澱が消え、随分顔色がよくなっていた。

帰りは飛行機で帰った。竹下が空港まで送ってくれた。東京行きの便は5時5分発だった。搭乗するまでに1時間ほどの時間があつた。ふたりがコーヒーショップに入ると、賢のスマホが鳴った。梓からだつた。

「賢さん、結果はどうでしたか？」

「まあまあだな。やはり外界からの影響で意識が変動しやすい人に対して話し掛けるのはかなり危険だな。意識の成長レベルを引き下げてしまう可能性がある。お姑さんとのコンタクトに問題が残った。後で、原さんとも相談しなくてはならないな」

「上手いかなかつたんですか？」

「子供たちとのコンタクトはまあまあだつたと思うけどね。難しいかもしれないけど、地獄的な意識状態に落ちやすい人とのコンタクトをどうするかが一つの課題だな・・・ところで、何か急用でもあるのか？」

「はい、鹿島さんから連絡が入つたんです。次の行動に出るので、その前に賢さんに報告しようと思って電話したと言っていました」

「何をしようとしているのか分らないか？」

「はい、理解し難いのですが、マリー・ジュベステルの軌跡を追ってアフリカに潜入すると言っていました。わたくしも、危険だからやめたほうが良いと言ったのですが、「今は誰にも話せないが安全な方法がある」と言っていました。いくら聞いても、その方法に附いては話してくれませんでした。わたくしは聞くのは諦めました。賢さんから直接聞いてみてください」

「そうか、それじゃ、僕が直接話してみるよ。情報をありがとう」  
賢は一旦電話を切ると直ぐに康介に電話を掛けた。康介は直ぐに出た。

「賢さん、久しぶり。商売の方、順調みたいじゃん。おれ、アフリカ行くっす。その前に賢さんと話したかったす」

「鹿島さん、どうやってアフリカに行くつもりですか？」

「今は言えないっす。言えば賢さんに迷惑が掛かるっす。だから言えないっす。明日発つっす」

「危険なことをするつもりなんじゃないですか？」

「大丈夫す。目的を達成するまで、彼女を救い出すまでは絶対引かないっす」

賢は鹿島のやろうとしていることを知りたかった。鹿島に及ぶ危険と、祐子への影響が心配だった。場合によっては止めさせなければならないと思った。しかし、鹿島は詳細を語らなかつたし、大丈夫だと言い切った。「これが自分の使命だ」とまで言った。賢は引き下がらざるを得なかつた。今後アフリカでの出来事には鹿島も関わって来そうだと思った。賢たちがアパートに着いたのは午後7時50分だった。原、愛子、そして梓も首を長くして待っていた。梓が、祐子を救済するための行動計画を立てる必要があると言った。鹿島が行動に出た今、座して朗報を待っているわけにはいかないと言った。亜希子も梓に同意した。しかし、具体的な行動に附いてはふたりともまったく考えが及ばなかつた。賢が言った。

「梓、亜希子、今はまだICPOに頼るしかない。とは言っても、相手は民族紛争でジェノサイドを経た国だから、政府を通した人道支援も末端までは及ばない。まして人身売買の組織を探し出して、拉致された人

を救済するとなると、もう及び腰になってしまって口先だけの対応しかしてもらえない。だから、僕たちは民間の組織を通じて祐子を探し出し、現地会社などを通して拉致した相手と交渉するという方法を模索するしかないだろう」

梓が言った。

「賢さん、わたくしが鹿島さんと電話で話していた時、鹿島さんがちょっと気になることを言ったのです。「祐子さんの連れて行かれた国は農業しかないけど、その農民の数も少ない。コーヒーやお茶だけじゃ生きていけない。祐子さんがそんなところに居たら、身体を壊してしまう。だから一刻も早く救い出さなくてはならない」って。なぜ、コーヒーとかお茶とか具体的に言うのかと思ったんです。ルワンダという国は、現在は各国の支援を受けなければ生き延びてゆけない国です。いろいろなものが不足しているはずなのに、なぜコーヒーやお茶だけは十分にあるというような言い方をしたのか一寸引っ掛ったんです」

「そうか、もしかすると、日本のコーヒー販売会社とか、大手のコーヒーショップたとえばムーンボックスとかバトールとかにアフリカに長期出張することを提案して雇用してもらい、アフリカにコーヒーの現地調達という形で長期出張して、ウガンダにもぐり込み、そこで調査や救出活動をするつもりなのかもしれないな。もしそうだとすると、すごい勇気とバイタリティだ」

「わたくしもあの人のバイタリティには圧倒されます。インドでも、チタビオンさんとふたりで運輸会社を調べていたときは、自分の身の危険さえも顧みずにどんどん危ない所に突き進んで行ったのですから、本当に敬服しました」

「あの人がいてくれたおかげで、僕たちは祐子のおおよその位置も、連れ去られた経緯も把握できた。いつまでも彼だけに頼っているわけにはいかない。僕も今度のプロジェクトでアフリカのドゴン族の調査に出かけようと考えているんだ。ドゴン族はリマのニジェール川沿いの岸壁に住んでいる種族で25万人ほどの少数部族なんだ。ウガンダからは少し離れているけど、その時にあの地域全体に存在している民族の意識を調

べて、民族間の融合を図る方法を見つけ出そうと思っているんだ。今度のプロジェクトでは、異なった意識を持った人々の集団間の調和を図ることも必要だと考えているんだ。それに、小集団がどのように独自の意識を貫いて生き抜いてきたのかを調べることも、役に立つことだと思っているんだ。自分たちとは異なった集団と意識がぶつかったとき、たとえばそれが他国からの横車であるにしても、ジェノサイドにまで発展する可能性があることを注意しておく必要がある。それにしても、祐子が民族間の意識の狭間にあって苦悶していると思うと、胸が苦しくなる」  
亜希子が言った。

「わたくし、あの国で話されている言葉を勉強します」

「どうして？そこまでしなくてもいいだろう」

「いいえ、わたくしはあなたに附いてアフリカに行き、鹿島さんと一緒に祐子お姉さまを救出する活動に加わりたいのです」

賢はただ頷いただけだった。原が言った。

「賢さん、青森の結果を聞かせてください」

「はいそうですね、今回もほぼ成功したと言ってもいいと思いますよ。ただ、会話システムは相手の意識を動かしてしまうので、相手が話し掛ける側の意識に反応しないように、相手の反応を予測して、動的なフィルターを掛けるように制御する必要があると思います。数値化なんてのはかなりむずかしいでしょうね」

「意識の波動関数に相手が反応した時の意識の波動値を代入して解を求めればいいので、数値化することはそれほど難しくはないと思います。そのことより、こちらからの会話の内容が相手に影響を与えないように、フィルターを掛けるポイントを見つけることのほうが数段難しいと思います。相手が少しでも反応してしまったあとでは、もう意識が変化し始めてしまうので、その前兆をキャッチして、その会話の内容が相手に伝わらないようにしなければなりませんから、一口にフィルターと言っても、微小変化を検知しての予測関数を用いた制御になるため、精度的にかなり厳しいと思います」

原と賢の会話は、3人の女性にはチンプンカンプンだった。梓は単語の

意味は分ったが、意識に波動関数を用いるという考えがすんなり頭に入って来なかった。原と賢は何とかなりそうだと結論に到達し満足げだった。

## キガリ

賢の予想した通り、康介はインドから帰国すると、直ぐにこれまで務めてきた会社を退職し、2カ月前にムーンボックスの求人に応募していた。面接の時、アフリカの現地にコーヒー豆の調達のために長期滞在をすることが夢だと言って面接官を驚かせた。これまでそんなことを言った応募者は無かった。すぐに採用が決まり、一時本社勤務を命じられていた。康介はWEBから東アフリカ沿岸諸国で話されているスワヒリ語の短期養成教育を申し込み、時間のある限り勉強していた。康介の希望はすぐに聞き入れられて、まず1週間の調査出張に出掛けることになった。康介はウガンダの首都カンパラに着いた時、自分の目を疑った。あの、祐子が拉致され連れ去られて来て幽閉されている国、民族衝突でジェノサイドの起きた国ルワンダの直ぐ隣の国とはどうしても思えなかった。ビルが立ち並び、イスラムのモスクもあり、さまざまなものが渾然一体となった活気ある街だった。人々の顔つきは決して暗くない。しかしその反面、道路は舗装されていたが街は混沌としていて、下水道は異臭を放っている。どの交差点にも信号は見あたらなかった。まだ、この国にはインフラが整備されていないのだ。康介は4日間ホテルに滞在した。その間、6社のコーヒー会社と面談し、コーヒー豆の調達契約をした。同行した調達部の部長は42、3歳の小柄な男だった。ウガンダのコーヒーの味と香りを評価していた。康介はほとんど部長と行動を共にしていたが、ホテルで自由時間のある時は、街に出てアフリカ中東部の地図やルワンダの資料を集めた。やはりルワンダに関する出版物は少なく、手に入れることは難しかった。康介は街をぶらつき、乗り物の乗り方を調べたりウガンダ人の気質を窺ってみたりした。3日目に最も原料を安定

的に供給してくれると思われるコーヒー豆会社の社長に接待されて、畑の見学に出掛けた。コーヒー豆の畑は広大だったが、働いている人の姿は無かった。社長は部長をコーヒーの木の下まで案内し、その良さを売り込んでいるようだった。畑を見学した後、社長はふたりをレストランに案内した。そこで出てきたのはウガンダの名物とも云えるテラピアの料理だった。ビクトリア湖で取れた淡水魚だと社長が説明した。鯛によく似た味だった。康介はウガンダの町が気に入った。ここなら何とか過ごせそうだと思った。部長も機会をみては康介に長期出張の時の注意事項などを話していた。しかし、そこからルワンダに行き、そこで祐子を探すのは並大抵のことではない。直接ルワンダの首都キガリに居住する策を考えてみようと思った。康介は1週間の出張から戻ってから、2週間後に長期出張することになった。準備期間は短かったが、初めからそのつもりだったので、準備もスムーズにいった。マラリヤや黄熱ワクチンの予防接種も済ませた。しかし花巻の母親に説明するときは、さすがの康介も緊張した。康介には妹が一人いたがまだ独身で、花巻のフラワーショップに勤めていた。母親は康介が東京に出て、すぐにアフリカに長期出張になることを聞いて涙を流したが、康介は「男は出世のためならどこにでも行かなくてはならない」と苦しい弁解をしてその場を凌いだ。康介が再びウガンダの地を踏んだのは母親に話をしてから僅か5日後だった。康介は覚悟を決めていた。なぜ自分が体を張ってまで祐子を救うために行動するのか、どうしても理由が見つからなかった。それは心の底から突き上げてくる何かだった。夢に出てきた存在からの言葉はもう康介を突き動かす原動力ではなかった。康介自身がそうしたいと感じていたのだ。最初の1ヶ月はホテル住まいをすることに決めてあった。その間にアパートを探すことにした。ホテルに滞在している間は、アパート探しと、毎日1回の本社への報告以外はまったくの自由だった。本社から、コーヒー豆会社を訪問したり、打ち合わせを命じられた日はその指示に従っていた。康介は自由な時間を利用し、街に出て国立図書館でルワンダの民族間抗争に関する資料を探した。ここは最近ワールドデジタルライブラリーに参加したばかりで、蔵書がデジタル閲覧できる

ようになっていた。康介は毎日書棚の書籍を閲覧してノートに記録していった。クツ族とブチ族の抗争はヨーロッパの覇権主義が生み出したものだという説明が書かれていた。ベルギーとフランスについての記載が多く出てきた。康介はこれまでに衝突の起きた場所を調べてすべて書き写した。ジェノサイドの現場になった場所は特に朱書きでマーキングした。現在はジェノサイド条約で国際的に禁止されているので、極端に走ることは滅多にないが、既に仲間の9割が殺されてしまったブチ族にとってはクツ族は鬼畜であり、悪魔的存在と化していた。しかし、国民は現在の平和な状態を維持したいと願っており、8万人にも及ぶジェノサイドにかかわった者たちとの共存を余儀なくされていた。逆にクツ族は今もなお自分たちの存在の正当性と優位性を妄信していて、肉親を殺されたブチ族による攻撃を受けると、その何倍もの仕返しをしていた。ジェノサイドの起きた当時は政府のバックアップもあり、残酷な仕打ちを繰り返した。新政府が僅か3ヶ月間でこの問題に決着をつけ、司法の場に判断を委ねてからは、表立った攻撃こそしなくなったが、見えないところでは醜い殺戮が繰り返されているとの説明が見受けられた。康介は、祐子の幽閉されている場所の特定につながる情報を何とか手に入れようとした。それと同時にコーヒーの栽培地域も記録していった。それは自分の仕事とも直接関係する内容だったので、国立図書館通いも正当な理由付けになるという一種の安堵感もあった。カンパラの町には身の危険を感じる場所は少なかったが、スラム街を通るときは、恐れ知らずの康介も身が引き締まる思いがした。外出は陽のあるときだけに限ることにした。1週間すると康介は国際バスでルワンダの首都キガリに行くことにした。本社はコーヒーの調達をウガンダよりむしろルワンダから行いたいという意向を持っていた。調達部長も次に訪問するときはルワンダのコーヒー豆会社と交渉したいと考えていた。康介はそれを幸いと感じていた。最近のルワンダの政情は安定していて、本社もルワンダに駐在することに異議を唱えることは無いと部長は言っていた。康介は9時発のバスに乗った。カンパラのホテルは1ヶ月契約になっていたのも、荷物はホテルに置いたまま、小旅行の支度で出て来た。12時には国境に

着いた。手持ちのドル紙幣をルワンダフランに交換した。紙幣交換の窓口担当者は金額を誤魔化そうとしたが、康介は騙されなかった。康介はこの国の生活レベルが影響しているのだろうと思った。ルワンダに入ると左右の景色はほとんど段々畑と背の低い灌木の茂みばかりになった。バスの窓から畑に通じる道の向こうに、廃棄された武器の残骸を見た。その周りの土地は荒れ果てて砂漠化していた。その遥か彼方にバラックのような家が二棟立っているのが目に入った。その景色が康介の脳裏に焼きついた。キガリの町には午後3時ころに着いた。そこは千の丘の街と言われるだけあって、起伏のある丘が四方にあり、丘の向こう側を望むことができない。バスから降りると赤道直下にも拘らず意外に涼しく、この標高が高いということを物語っていた。カンパラのホテルから既にこのキガリのバス停近くのホテルを予約してある。1泊45ドルの安宿である。ルワンダのホテルには1週間滞在するつもりだった。アパート探しは主に午前10時から午後3時までの間に行った。ルワンダの新聞キガリ紙に載っている広告を見て、先ず電話を掛けてから訪問するというプロセスで探した。日本の本社は身の安全確保を考慮し、ウガンダの首都カンパラ市内にセキュリティガードの付いたアパートを借りるように指示していた。しかし、康介は調達部長にルワンダの首都キガリに住居を確保することを相談しようと思っていた。康介はキガリでの居住さえかなえばどんなアパートでもかまわなかったが、その費用はすべて本社が負担することになっていたのも、躊躇することなく居住性がよく交通面で利便性のよい安全な場所を探した。バス停の近くに外観もまだ新しいコンドミニアム様式のアパートを見つけたのはキガリに着いた翌日だった。康介はカンパラのホテル滞在期間1ヶ月が経過した翌月からの契約をした。後は何とかなると踏んでいた。そこには既に各国からの海外協力グループのメンバーが居住しているとのことだった。契約をした日はそれらの住人に会うことはなかった。そのアパートには住人共用の広いラウンジがあり、いくつかのテーブルと椅子が用意されていて、読書などができるようになっていた。康介は常にスワヒリ語の辞書を持ち歩いて、気になる単語をいちいちスワヒリ語に訳すように心掛け



ていた。その所為もあり、日一日とスワヒリ語にも慣れてきた。ルワンダのホテルに宿泊して3日目にキガリ市内を歩いていると、少し大きめの平屋の建物の中から子供たちの歌う声が聞こえてきた。康介は開け広げられた窓から中を覗いてみた。15人ほどの子供たちが土床の上で、輪になって唄を歌いながら、フォークダンスのような踊りをしていた。その周りを取り囲むように20人ほどが土床に座って唄を歌っていた。康介は子供たちの解放された顔つきを見てほっとした気分を味わいながら、暫く窓際に佇んで子供たちのダンスを眺めていた。子供たちは屈託のない顔をしてはいたが、中に5人ほど片方の手や足の無い子供たちが混じっているのに気付いた。その子供たちも明るく歌っている。一人の目の大きな男の子が近づいて来た。顔が皮膚病であちこち白くなっている。

「Mjomba, Hujambo」(おじさん、こんにちは)

「Hujambo」(こんにちは)

「Manatoka wapi?」(どこからきたの?)

「Natoka Japani」(日本から来たんだ)

「Mimi unajua mwanamke mmoja Kijapani」(ぼく、日本人の女の人を知っているよ)

康介は海外協力隊の人だろうと思った。

「Yeye anaishi katika kambi. Yeye kuokolewa mama yangu. Jina lake ni Yuko.」(そのひと、キャンプに住んでいるんだ。ぼくのお母さんを助けてくれたんだ。ゆうこって人だよ)

康介は心臓が飛び出すほど驚いた。男の子は康介の驚いた顔を見て、興味深そうに聞いた。

「Je, unajua yake? Yeye ni mzuri sana. Na, Yeye ni rafiki sana.」(おじさん、その人を知っているの? とってもきれいな人だよ。それにやさしいしね)

康介は心臓の鼓動がはっきりと聞こえるほど興奮してきた。祐子に違いないと思った。

「Wapi mimi kambi?」(キャンプはどこにあるんだ?)

「Ni siri. Mimi siwezi kuzungumza juu yake.」(秘密だよ。誰にも言っちゃいけないんだ)

4、5人の子供たちが、少年の近くに寄って来た。

「Je, siku zote hapa?」(君はいつもここに来るの?)

「Ndiyo, Nina mengi ya marafiki.」(うん。友達がたくさんいるからね。)

「Kuona tena.」(また来るよ)

男の子は飛び跳ねるように仲間のところに駆けて行った。興味を持って寄ってきた子供たちも、少年が仲間の所に戻ってしまったので拍子抜けしたように、少年の後を追って戻って行った。康介の心臓の鼓動は鎮まることを知らないように激しく脈を打っている。まさかこれほど早く祐子の消息が知れるとは思ってもよらなかった。その少年にあまり執拗に質問してはまずいと思った。キャンプが秘密ということになっているという事実がそれを示していた。ここからは周囲を意識して慎重に行動する必要があると思った。康介は急いでホテルの部屋に戻った。部屋にはファックスが届いていた。本社からだった。近日中にコーヒー豆の買い付けのために、調達部長が再びウガンダを訪れるとのことだった。前回訪問した会社と事前にコンタクトをとるようにとの指示だった。康介は祐子のことで頭が一杯だった。しかし、仕事を疎かにすることはできない。直ぐにウガンダのコーヒー豆会社の社長に電話をしアポイントメント(面会の約束)を取った。ルワンダのコーヒー豆会社3社にも電話を掛けた。ビジネスでは英語を使うことができた。特段英語に自信があったわけではないが、相手も同じことと思うと片言の英語で十分コミュニケーションを図ることができた。ほとんど苦勞することは無かった。調達部長が来るのは1週間後ということになった。翌日も康介は子供たちの集まっている建物に出掛けてみた。しかし、あの少年の姿は無かった。その翌日も少年は姿を現わさなかった。康介に焦りの感情が湧いてきた。「どうして、あの時無理にでもキャンプの場所を聞き出さなかったのか」自責の念にかられた。少年と再会できずにウガンダに戻らざるを得なかった。カンパラに帰った4日後に調達部長はやって来た。康介はレンタカーを借りた。カンパラからビクトリア湖岸にあるエンテベ国際空港ま

では整地されていない道なので、およそ1時間かかった。部長の到着は午後2時50分の予定だったが、康介は1時半には空港に着いていた。EXITの前で部長が出てくるのを待った。何人かの男が出て来た。その中に見覚えのある黒人がいた。康介はその男が気に掛かった。しかし、どこで見たのかどうしても思い出せなかった。それから10人ほど後に調達部長の佐川が出て来た。

「やあ、鹿島君ご苦労様。どうだいこっちの生活は？」

「お疲れ様でした。結構面白いです、部長」

「そうか、それはよかった。本当は根を上げているんじゃないかと心配していたんだ」

康介は佐川の荷物を持つと、駐車場に向って歩き出した。

「部長、さっき、どこかで見たことのある男が降りて来たんですけど、その人、黒人なんですけど、どなたかお知り合いの方はいらっしゃいませんか？」

「いや、気が附かなかつたな。それに、黒人はみんな同じような顔に思えるからな」

「そうですか」

康介はその男の顔が脳裏に引っ掛かっていて、気分がすっきりしなかった。ふたりがカンパラのホテルに着いたのは5時近くだった。康介は佐川にルワンダのアパートを契約できたことを告げた。

「鹿島、ルワンダのほうが環境やインフラの点でずっと住みにくいと思うが、それでもいいのか？ウガンダに居て、必要なときだけルワンダに行ったらいいんじゃないのか？」

「部長、ぼくはコーヒーの味にはあまり詳しくないですが、素人の味覚でもルワンダの方が香りが深いように思います。ですから、できるだけルワンダの国内に居て、より優れたコーヒーを産出するコーヒー豆会社を捜した方が会社のためになると思ひまして、勝手にアパートを契約してしまいました。部長が反対でしたら、キャンセルします」

「鹿島君、君もいい感覚を持っているじゃないか。実は俺もそう思っている。だから、君さえよければ是非キガリに駐在してほしいと思ってい

たんだ。」

「そうでしたか。僕はそのほうが働き甲斐があります」

康介は心にも無いことをぺらぺらと話した。

「まず、ウガンダのアストリアコーヒーとの商談を済ませてから、キガリに移ろう。丁度ホテルの契約も切れるだろう。君はキガリのアパートに移る。俺もキガリのホテルに移ることにしよう。それから、君から連絡をもらった3社を訪問してみよう」

「はい、部長にも是非僕のアパートをご覧になって頂きたいと思います」

「おう、そうだな。そのことは総務部長からも頼まれている」

ウガンダの商談も、ルワンダの3社との会合もうまくいった。ウガンダのアストリアコーヒーとは定期購入の契約をすることができた。

「あそこは社長が日本最<sup>てい</sup>頂だからうまくいった」

と佐川は満足げだった。キガリに移動するとまず佐川はホテルにチェックインした。康介は部長と別れてアパートに出かけ、オフィスの女性に今日引っ越して来たことを告げた。2階の端の日当たりのよい部屋だった。アパートは小高い丘の上にある。前回来たときは感じなかったが、その丘はほかより高い位置にあるらしく、部屋の窓からはかなり遠方まで見渡せた。部屋自体はそれほど新しくなかったが、2部屋に分かれていた。寝室にはベッドやチェストから寝具まで一通り揃っていて、居間にはソファ、テーブル、2脚の椅子が用意されていた。キッチンにはキッチンウェアや冷蔵庫、レンジなど必要なものがすべて揃っていた。バス、トイレもこじんまりとしてはいたがきちんと整備されていて、バスタオルまであった。オフィスの女性に部屋に案内されたとき、康介は一目見て満足した。まるでホテル並だと思った。その日からその部屋に住むことになった。翌日康介が車で佐川を案内しルワンダの3社とそれぞれ会合を持った。3社の社長はいずれも積極的だったが、佐川は慎重な姿勢を保った。問題は品質の確保と安定した供給能力だった。この日の訪問だけではそれを見抜くことが難しいと佐川は考えた。ルワンダでは優秀な人材を確保することが難しいことを佐川はよく知っていた。「これから暫くの間、君には3社のフォローをしてもらいたい。それと、そ

の他に目ぼしい会社が無いかわかる調べてほしいんだ」

次の日に康介は佐川を自分のアパートに案内した。佐川はそこが安全で、設備も揃っていることに満足した。

「これなら、嫁さんをもらっても大丈夫だな」

佐川は冗談めいたことを言った。康介は祐子のことが脳裏を掠めたが、自分でもどうしてなのかわからなかった。ただ、胸が熱くなるのを感じた。

祐子は黙ってドアのロックを外し、扉を開いた。

「Habari ya jioni.」(こんばんは)

そう言うとバラックは祐子のほうを見て微笑み、ゆっくりと部屋の中に入って来た。祐子は黙って扉を閉め、ロックをした。バラックは椅子に腰掛けると英語で話し始めた。祐子はバラックの配慮をありがたいと思った。

「Yuko, I came here today for the talk with you.」(祐子、今日は君と話をしたくて来たんだ)

「Yes.」(はい)

「How do you feel to live here.」(こちらでの生活はどうだ)

「I got used rather to live here」(大分慣れました)

「Ok, I' m relieved to hear it. I really apologize you.」(それを聞いて安心した。君には本当にすまないと思っている)

「I regret to live here like this . . . . .」(わたしもこんな形で生きるの残念です . . . . .)

「I' m very sorry, but I hope you could be here to help people.」(すまないと思うが、君にはここに居て人びとを救ってほしいんだ)

「I cannot help any person.」(わたしには人を救うことなどできません)

「Yes, you can. I recognize that you have universal love.」(いや、君にはできる。わたしは、君に普遍的な愛を見た)

祐子はバラックが紳士であることを初めて知った。常識的に考えても、奴隷として買い取った女性に対して、このようなことを言うはずはなか

った。祐子は自分がなぜ買い取られたのかを聞いてみたくなった。

「May I ask something?」(質問があるのですが)

「Please, do not hesitate to say me anything.」(どうか、わたしには何でも話してくれ)

「Although you are a gentleman, why did you buy me like that.」(あなたは優しい人なのに、どうしてあんな風にわたしを買ったんですか?)

「I love Japanese. I really love Japanese lady. I expected that one Japanese lady could live here with us, could teach us Japanese mind and could help groaning people from unexpected pain. I knew it was dirty act. But I couldn't chose another way, because this is battle field.」(わたしは日本人が好きだ。特に日本人の女性が好きだ。日本女性に、我々と共に生き、我々に日本人の心を教え、そして、苦しんでいる人びとを救ってほしいと思ったんだ。卑劣な方法だが、こうするしか方法は無かった。ここが戦闘地域だからだ)

「But, Mary doesn't think so. She handed me a see-through nightgown.」  
(でも、マリーはそう考えていないわ。わたしは彼女から透けたネグリジェを渡されたわ)

「She thinks you are my slave. Therefore, I believe that she prepared your clothes for my wife.」(彼女は、君を奴隷と考えている。だから、わたしのワイフとして君の洋服を準備したんだと思う)  
祐子はバラックがセカンドワイフと言わずにワイフと言ったのを奇妙に感じた。

「You don't have such kind of emotion, do you?」(あなたは、わたしにそういう感情を持っていないのですね)

「You are beautiful. You are just like an angel. I wish you were my wife. It will be a dream for me. However, your love is too huge for me alone to receive. I hope to save the tribe. Many people died. The injured people are still suffering from serious wounds. It is more important to save them.」(君は美しい。本当に天使のようだ。君のような女性が妻であれば夢のようだ。しかし、君の愛はわたし一人で受けるには大きすぎる。わた

しは種族を守りたい。大勢のものが死んだ。ひどく傷ついたものたちは今も苦しんでいる。彼らを救うことの方が大切だ)

バラックは涙を浮かべた。祐子は心の中で、バラックの心の広さに敬服した。今日も一人の男の命が失われた。バラックの悲しみがひしひしと伝わってきた。この男の心を癒してやることも必要だと思った。

「Why don' t you take a bath, before going to bed.」(お寝みになる前に、入浴されたいかがですか?)

バラックは頷いて浴室に向かった。浴室の前のタオル掛けの横に、男物のバスローブを用意してある。祐子は覚悟を決めた。ワンピースを脱いで裸になると、透けたネグリジェを身に着け、ベッドのサイドに浴室に背を向けて腰掛けた。祐子の脳裏に賢が浮かんだ。祐子は心の中で賢に話し掛けた。

「あなた、わたしはこの男に抱かれるわ。でも、意識はあなたの下に移すわ。わたしを守ってね」

祐子は意識をその場から外した。暫くしてバラックが腰にタオルを巻きつけて浴室から出て来た。バラックは祐子がネグリジェに着替えているのを見て驚いた。祐子はあまりにも美しかった。バラックは高鳴る心臓の鼓動を抑えることができなかった。祐子はバラックの鍛え上げられた精悍な肉体に圧倒されてしまった。黒人の男は強く、激しかった。その激しさで、肉体の意識は祐子の体に戻ってしまった。祐子の肉体は、官能の渦の中に巻き込まれてしまった。何度も絶頂に達した。バラックは朝まで祐子から出なかった。肉体の歓喜の中でも、常に祐子は意識を賢の下に移そうとした。しかし、祐子は激しいバラックの抱擁に抗うことができなかった。祐子の体は徐々に目覚めたようだった。朝になってバラックが祐子から離れようとする、祐子はバラックの肩を引き寄せた。バラックは再び祐子を抱いた。

「Yuko, I love you. . . . I love you.」(祐子、)愛している. . . .愛している)

祐子は黙っていた。バラックが離れると、祐子はベッドから降り直ぐにシャワーを浴びた。快樂の余韻が体中に残っている。祐子はバラックの

体臭を洗い落とした。そして、意識を部屋に戻した。しかし、まだ身体には痺れたような余韻が残っている。気だるい感覚の中で祐子はいつものワンピースに着替えてからベッドサイドに戻った。バラックも既に着替えを済ませていた。バラックは戻って来た祐子を見ると、急に抱き寄せ額に口付けした。祐子は黙っていた。バラックは祐子を強く抱き締めた。祐子は目を瞑った。バラックは祐子の唇を吸った。そのままふたりでベッドに倒れこんだ。ふたりは服を脱ぎ捨てて、再び結びついた。祐子の目から涙が流れた。バラックは言った。

「Yuko, Yuko. I never leave from you. You are my Goddess, my eternal wife. I keep loving you forever.」(祐子、祐子、決して君を放さない。君は女神だ、わたしの永遠の妻だ。わたしは永遠に君を愛し続ける)  
ふたりは激しく求め合った。バラックが起き上がった後も祐子はしばらくの間、ベッドから動けなかった。もう、シャワーを浴びようとも思わなかった。バラックは祐子の額に口付けをすると、服を着替えて部屋を出て行った。祐子はそれでもまだ動けなかった。そのまま余韻に浸っていたかった。祐子の頬を涙が伝わって流れた。賢への想いが湧き上がってきた。

「あなた、なぜ、わたしを守ってくれなかったの？わたしはバラックに身も心も許してしまったわ」

祐子は気だるさの残る体で午前中の仕事をこなした。賢に対する気持ちとバラックに対する気持ちが混沌として、自分でも夢の中にいる様な気がした。昨日の傷ついた兵士たちが祐子の姿を見ると会釈をした。祐子は兵士たちに近づくと、一人ずつやさしく手をとってさすってあげた。ふと看護婦室の方を窺うと、ドアの前でバラックが数人の兵士を前にして話をしていた。兵士たちは真剣な形相をしていた。祐子はバラックに対して、心の奥から愛おしさが湧きあがってくるのを感じた。祐子は熱く沸き立った胸を静めると、自分の担当している患者を看て廻った。みなそれぞれに祐子に好意を示していた。祐子がジュタのところに行くと、ジュタはもうすっかり回復しているようで、松葉杖をうまく操ってびよこっと立ち上がった。



「Yuko mama, Mimi kutembea.」(祐子ママ、ぼく歩けるよ)

そう言って、松葉杖をコトコト音をさせながら狭い通路を歩き回って見せた。祐子はジュタに近づいて頭を抱き締めた。

「Ni nzuri」(よかった)

ジュタは喜び勇んで、松葉杖をうまく使いながら通路を出口の方に向かって駆けて行った。祐子は、これでジュタもまた友達の下に戻れると思った。祐子がジュタの後ろ姿を見つめていると、バラックが背後から声を掛けた。

「Yuko, will you teach people here Japanese mind tonight?」(祐子、今夜みんなに日本の心を教えてくれないか?) 祐子はバラックの声で、血が熱くなるのを感じた。

「Yes, . . . my . . . pleasure」(はい、. . . よ . . . 喜んで)

祐子は自分の顔が紅潮しているのが分かった。こんな感情は賢に愛されたとき以来だった。自分はバラックを愛し始めたのだろうかと思った。そのとき、看護婦室からマリー・ジュベステルが出て来て、バラックに近づいた。

「Habari za asubuhi.」(おはようございます)

祐子とバラックは同時に言った。

「Habari za asubuhi.」(おはようございます)

その調和した応答にマリーは祐子のほうを見て、意味ありげに笑った。

「あなた、うまくできた? 妻になることだめ。あなたは奴隷」

祐子はそれを無視した。バラックはマリーを促して看護婦室の方に戻って行った。その日の昼、祐子はピピ、スージ、マリゼと共に食事をした。彼女たちの話題は遠巻きながらも、バラックの話に移っていった。ピピはバラックの話になると、そわそわしはじめた。祐子は3人の会話から、バラックが独身であることを知った。一度結婚したが虐殺で妻と2人の子供を失っていた。それからは多くの女性が彼に近づいたが、誰も結婚しなかった。マリゼが、「男らしく、力強く、頭がよい、この部族の実質的な首長だ」と言った。「彼は未だに妻のことを愛しているようだ」とも言った。誰もがバラックを尊敬しているようだった。3人はマリー

については口にしなかった。祐子が尋ねてみると、「彼女はフランス人で、5年前から彼の秘書をしている」と言った。しかし、「誰も彼女がフランス語を話しているのを聞いたことがない」と言った。バラックはこのキャンプだけでなくルワンダ全域にあるすべてのキャンプを統括している長であることと、同時に大きなコーヒー園を持っていてコーヒー豆の会社を経営しており、その収益で民族を守るための活動費を賄っていることを知りバラックに対する尊敬の念と愛おしさがますます強くなった。その晩、看護婦室において祐子が日本の心についての講演を行った。講演と謂っても看護婦全員と6名の兵士だけが出席したこじんまりした説明会であった。ピピ、スージ、マリゼも出席した。バラックも出席したがマリーの姿は無かった。祐子は黒板に世界地図を描き、まず日本の位置から教えた。自分たちの住んでいるアフリカについてさえ、詳しく知っている者は無かった。祐子はアフリカの大きな国だけは把握していたので、ルワンダをコンゴの横に小さく描き、それがみんなが住んでいるところだと説明した。そこからヨーロッパ、エジプト、インド、中国、と大国の位置を示し、そして、日本が海の中に位置していることを説明した。ピピがフランスとアメリカはどこかと聞いた。祐子は黒板の地図をさらに書き広げて結局世界地図を書き上げてしまった。祐子はスワヒリ語に詰まると英語で説明した。バラックが英語をスワヒリ語に通訳した。世界地図の中の日本の位置を全員が把握すると、次は日本地図を大きく描いて、日本が大きな4つの島に分かれていることを説明した。このあたりから、みんな目を丸くして聞いていた。時々当番の看護婦が戻って来て、別の看護婦が交替で出て行った。北海道、本州、四国、九州と説明し、東京がどこにあるかも示した。半数の者が日本の首都が東京であることを知っていた。次に日本の四季について説明し始めた。マリゼが、どうして地図や気候の説明をするのかと聞いた。祐子は、日本の心は四季の移り変わりに結びついていると応えた。誰も理解できていないようだったが、バラックだけが頷いた。四季の説明は主に植物と魚で説明した。春は桜、夏はスイカ、秋はもみじ、冬は雪にポイントを置いた。そして正月の祝い、入学式、ゴールデンウィーク、梅雨、

夏祭り、台風、月見、暮、と自然の変化と人びとの動きを交えて話を進めた。皆、まるで日本に住んでいるような気持ちになってきた。そして、その日の最後に日本人の生活の節目を説明した。誕生から753の祝い、幼稚園から大学院まで、そして各種施設について説明してその日の講演は終わった。皆、日本に興味を覚えたようだった。これから毎週1回講演会を行うことになった。そしてその日が、バラックが祐子と共に過ごす日であることを意味していた。祐子が講演を終えて部屋に戻り、入浴を済ませて寛いでいると、バラックがやって来た。まだ今朝の余韻が祐子の中に残っている。バラックの姿を見ると、祐子は身体が熱くなってくるのを感じた。しかし、この夜は透けたネグリジェは着なかった。バラックがシャワーを浴びている間に木綿のネグリジェに着替えた。あまり、バラックを興奮させないためだった。しかし、それはバラックにとっては関係ないことだった。祐子は直ぐに全裸にさせられ、強く抱かれた。祐子はもう、意識を切ることをしなかった。

「このまま、この男と一生を共にしなければならなくてもかまわない」と思った。バラックに抱かれながらふと目を開けると、ボールが目に入った。ボールはピンク色になっていて、時々輝くように点滅した。祐子はボールが何か語り掛けているような気がして、意識をボールに集中した。

「祐子、俺だ、分かるか？」

賢の声だった。

「分かるか？分かったら、何か応えろよ」

祐子はバラックの動きが激しくなっているのを感じていたが、しかし、意識は賢に向けた。

「あなた、わたしは、もう、元のわたしじゃないわ。許して」

祐子はそう心で叫ぶと、再び意識を自分の身体に戻した。バラックの激しい息遣いと、祐子を労わる優しく力強い動きの中に埋もれていった。バラックにも祐子の心の動きが分かったようだった。一度終わると、バラックは祐子から離れた。そして、優しく祐子の身体を抱き締めた。祐子は言った。

「Barack, I love you.」(バラック、好きよ)

バラックの目に涙が浮かんだ。バラックはしばらく祐子の目を見つめていた。祐子は思った。

「身体の色は黒いが、心は日本人と同じだ。この男はなんと優しい心を持っているんだろう」

祐子の心を読んだように、バラックは祐子を強く抱き締めると、また祐子の中に入っていった。この日は流石に疲れが出ていて、ふたりは途中で眠りに落ちた。気が付いたとき、バラックは既に着替えを済ませていた。バラックはベッドに横になっている祐子を抱き起こして抱き締めた。祐子は日に日に看護婦の仕事をマスターしていった。祐子の頭の中に日本の病院で見た看護業務の運び方が蘇ってきていた。それらのことを考慮し、衛生面や手順などで改善すべきことを進言した。バラックの推挙もあり2ヵ月後には祐子はキャンプの看護婦長になっていた。そして、いつもバラックと共に行動していたために、周囲の者達に祐子がバラックの恋人であるかのように受け取られ始めた。当初、祐子に反発するような態度をとっていたピピもバラックが祐子の部屋に泊まっていることを知ってから諦めたようで、素直に祐子の指示に従うようになった。2回目の講演で祐子は日本の歴史について話した。日本の心の元は縄文と弥生の時代に遡ると説明した。祐子の好きな分野だった。しかし、それを説明するためには祐子にはバラックとピピの助けが必要だった。バラックは祐子が英語で説明した部分を、スワヒリ語に翻訳し、ピピは祐子が、言葉を見つけられずに行き詰ってしまい、やむなく日本語で話してしまったときに、祐子に尋ねながらそれをスワヒリ語で参加者に説明した。

「日本人の心はもともと縄文人の心から出ている。縄文人は競うことをしない自然と調和した民族だった。縄文の心は愛の心。今から1万年以上も前から縄文時代は始まっていて、5000年以上も平和が続いた。現在の人間にとっては想像を絶することだ。その意識はすべてがひとつで個という捉え方が無く、愛と調和の中に息づいていた。現在の寿命と比較すると1/3ほどの短い人生だったが、永遠の生命を知っていたの

で、肉体への執着も無かった。日本各地からいろいろな祭器が見つかった。縄文人は宇宙根源の神と地母神を敬っていた。今でも日本人はひとつの事に国全体が反応して突き動かされる。それは縄文から引き継いだ日本人の意識の特質だが、西欧社会との競争では、時に弱い面として現れることもある。しかし、日本はどんな苦境も国全体の力で乗り越えてきた。紀元300年ころ大陸から弥生人が押し寄せ、日本の文化の中に居座った。それは知の文化だった。愛の文化と知の文化が融合したのが日本の文化だ。弥生になってから競争の社会になった。武士社会が現れ、宗教が現れ、政治制度が現れた。それからは物質的な発展が起きたが、縄文の頃の心が失われ、現在の日本人の中にはもうこの愛の心を持った人間が非常に少なくなった。今、日本に居る自分のフィアンセが日本人の心の改革に取り組み始めている」

2回目の講演はバラックに感動を与えた。しかし、最後のフィアンセの話聞いてバラックの顔に一瞬寂しそうな影が窺えた。ほかの参加者は、自分たちの部族と縄文人とを比較して見ているようだった。皆それぞれに、自分たちの種族の中に美しい心を見出そうとしているかのようであった。バラックはその日の夜、祐子の部屋で、「日本の根底にある民族としての一体感が、自分の国にも必要だ」と祐子に話した。それから「この国にも、以前はそのような調和した心があったが、それは国全体ではなく、部族内に限ったことで、これからは国全体として、そのような愛の心を取り戻すことが必要だ」と言った。2回目の講演を終えたころから祐子はみんなから尊敬の眼差しで見られ始めた。若い者たちからは「Mama Yuko」(ママユウコ)と呼ばれるようになった。平穏な日々が続き、負傷者や病人は順調に回復していった。祐子はその後も毎週講演を続けた。3回目の講演では、地方に住む日本人の民話について話した。民話は祐子のもっとも好きな世界である。日本の中で歴史として語られている武士や宗教家など当時の著名な人々とは別の、自然の中に抱かれた人びとの日常の生活と心の動きについて話した。遠野の話もした。河童の話をしたときは黒板に河童の姿を描いて冗談を交えて話した。出席者は大いに喜んだ。全員が河童をはじめて知ったようだった。第4回目

は日本の宗教について話した。日本神道が日本人の心の奥にあること、現在の皇室は歴史の中で日本神道のしきたりを守っていること、そして飛鳥時代に仏教が伝来し、日本人は神道と仏教を両方信じるようになったこと。日本人は相矛盾するものや、異質なものを自分の中に取り込んで、独自の世界を作り上げる能力に長けていることを、黒板を使いながら講義した。出席者は祐子がまるで大学教授のように見えてきてますます祐子に対する尊敬の念を大きくした。祐子はアフリカにもドゴン族という種族が住んでいて、人類の創生時の話ではないかと思われるペトログリフ（岩刻絵文字）が残っていると補足説明した。みな、アフリカのことを言われて、自分たちの住んでいる大陸についてさえもよく知らないことを恥じているようだったが、祐子は「自分はこういうことが好きで、日本に居るときに勉強したから知っている」と説明し、出席者が劣等感を感じないように配慮した。その後も講演は継続された。10回目のとき、講演の最中に祐子は身体の変調を感じ、途中で何度か吐き気を催した。夕食はあまり食欲が無く、食事が済むと気分が悪くなって戻ってしまった。その日は朝から吐き気を催していた。祐子の妊娠をいち早く察知したのはマリゼだった。コップに水を入れて祐子のところに来た。「Mama Yuko, Je wewe ni mjamzito?」（ママユウコ、あなた、妊娠しているでしょう?）

祐子は自分の腹部を見て苦笑した。そんな予感がしていたが、マリゼに言われて、「やはりそうだったのか」と思った。その晩、祐子はバラックにそのことを告げた。バラックは飛び上がって喜んだ。そして、直ぐに結婚しよう」と言った。祐子は応えた。

「Barack, I will give birth to your baby. But, I do not marry to you. I' ve a fiancé. So, I can' t marry to you .」（バラック、わたしはあなたの子供を生むわ。でも、結婚はしない。わたしにはフィアンセが居るの。だから、結婚はできない）

バラックは寂しそうだった。しかし、祐子の意志が固いと見ると、諦めて今後の祐子の生活方法に話を移した。祐子はあくまでキャンプで生活すると言った。バラックは生まれた子供をここで育てるのは危険だと言

った。祐子もそのことは百も承知だった。話し合いの結果、子供は乳母に任せてバラックの家で育てることになった。しかし問題があった。バラックの家がキャンプから離れていることだった。翌日の朝、バラックは祐子を自分の家に連れて行った。まだ腹部は目立たない。祐子は途中で食料品店に寄るようにバラックに頼んだ。パンと豆などの食料を調達した。食事を作るつもりだった。バラックの家はキャンプから車で2時間ほどの小高い丘の上にあった。もっとも、バラックは祐子を気遣って、非常に遅い速度で運転したので、普通の3倍の時間が掛かっていると祐子は思った。広い庭のある大きな家だった。しかし、家の中はがらんとしていて装飾品はほとんど無かった。居間のソファも家の大きさに合わないこじんまりとした物だった。キッチンも広々としていて、作り付けのキッチンセットも働きやすそうだったが、まったく使った形跡が見えない。バラックは祐子を寝室に案内した。ドレッサーやクローゼットの中には妻の遺して逝った品物がそのまま残っていた。バラックはそれらの品物を片付けようとしたが、祐子がそれを止めた。

「Barack, she is only your wife. You had better to treasure her.」(バラック、彼女はただ一人の妻よ。大切にしてくれ。)

バラックは頷いた。浴室にはバスタブもあったが、使っているようには見えなかった。バスタブの横にあるシャワーの周りだけが湿り気を含んでいた。浴室の床に敷かれたタイルもそこだけが光を反射していて、いつも使われていることを物語っていた。ベッドはツインで片方のベッドカバーがしわくちゃに丸められていた。もう一方はきちんとベッドメイキングされていたが、ずっと使っていないことが一目で分かった。祐子はしわくちゃのベッドカバーを取り除け、シーツを伸ばしてきちんとメイキングし、枕とベッドカバーを整えた。ほんの1分だったがバラックはそんな祐子の姿をじっと見つめていた。

「I don' t sleep on this bed.」(わたしは、ここでは寝ま<sup>やす</sup>ないわ)

バラックは黙っていた。寝室にはベッドから見上げると空の様子が窺える位置に窓が一つ付いている。その日はうす曇りで、祐子は心なしか物悲しさを感じていた。寝室以外に4部屋があった。2つの部屋は子供た

ちの部屋のようなようだった。きちんと片付いていたが、使われている形跡は全く無かった。3部屋目は予備室ということで、清掃されていてベッドもきちんと用意されていた。来客を泊めるときに用いているとのことだった。最後の部屋に案内されたとき、祐子はびっくりした。そこはまるで研究室のような印象を祐子に与えた。バラックの書斎だった。部屋の奥には、上に書類が積み上げられた机が置かれていたが、部屋の広さには似つかわしくないほど小さく見えた。それほどその部屋は広かった。右側の壁いっぱい書棚が設けられていて、書籍がぎっしりと詰まっている。左側の壁には大きなルワンダの地図が張っており、地図の表面に赤いピンが一杯刺してあった。バラックはそれがキャンプのある場所だと言った。地図の中にはグリーンのマークのついている地域があり、そこがブチ族の居住地とのことだった。黒い×印の付いている箇所が攻撃を受けた場所で、赤い四角の書き込まれた場所が殺戮のあった場所とのことだった。そして、地図全体、至る所に灰色の丸印が書き込まれていて、それがジェノサイドの時にブチ族が殺戮された場所とのことだった。その地域があまりにも広域にわたっていたので、祐子はその悲惨さに、胸の苦しさを覚えたほどだった。その部屋には大窓は無く、机のある側の壁の天井近くに明り取り用の窓が附いているだけだった。バラックは「家に居るときはほとんどこの部屋に居る」と言った。ルワンダの地図の横に2つの額に入った認定証が掛けられていた。バラックはアメリカの大学の大学院を卒業していた。そして、心理学の博士号を取得していた。その部屋を出ると、祐子は厨房に入り食事の支度をした。朝食を摂っていなかったのも、ふたりとも空腹を覚えていた。祐子はいつも食べている豆のスープとサラダを用意した。主食はパンにした。バラックは目を細くして、祐子の作った食事を食べた。

「Of course, I hope you could live here for me, however, it maybe better to live in the camp when I think about my friends. They began to love you as our mother.」(わたしは、君がここに住んでくれるとうれしいんだが、だが、仲間の為にはやはり、キャンプに住むべきかな。みんな、君を母のように慕い始めているからな)



祐子は毎週の講演を欠かすことは無かった。祐子が講演をしていることと、その内容が素晴らしいという噂がブチ族の間に広がった。そして、ルワンダに来て半年が経過した頃には、祐子はブチ族の者たち全員から“Mama Yuko, Mama Yuko”と母のように慕われるようになっていた。祐子は病人を見ると必ず声を掛け、やさしく手を取り、そしてどこが悪いのか尋ねて直ぐにその場で病の全快を祈って瞑目をした。その姿がブチ族の者にとっては女神の姿に映った。バラックさえも、祐子には敬意を表していて、祐子が通るときは足場を清めるような行動をした。祐子は自分の祈りの集中力が高まってきたのを自覚していた。あるとき、目の視力を失った少年を見舞った。祐子は両手を広げて少年の目を覆い、創造主に祈りを捧げた。極めて意識がクリアで、集中力が高まっていることを感じていた。両掌はジンと痺れを感じている。祈りを終えて、立ち去ろうとしたとき、少年が、

「Mimi wanaweza kuangalia.」(目が見える)

と声を張り上げて言った。

「Mimi wanaweza kuangalia ! Macho yangu ni kazi. Mimi wanaweza kuangalia kila kitu.」(目が見えるぞ、僕の目が見える。みんな見える) 周りにいた看護婦が集まって来た。少年は涙を流している。看護婦たちも感激して言葉を失っていた。周りの患者たちも全員が祐子を見つめていた。

「Mama Yuko ni Mungu. Yeye alikuja hapa kutoka mbinguni kutuokoa.」

(ママユウコは女神様だ。わたくしたちを救うために天国からみえたんだ)

皆口々に祐子を称えた。祐子は言った。

「Mimi ni mtu kawaida. Mimi si Mungu. Mimi ni sawa na wewe.」(わたくしはただの人間よ。女神様じゃないわ。あなたと一緒によ)

「No, Mama Yuko ni Mungu. Wewe ni miujiza.」(いや、ママユウコは女神様だ。奇跡を起こされた)

人びとの興奮は収まらなかった。病人に付き添っている家族の何人かが病人のために用意した果物を祐子の下に持って来て捧げた。

「Mama Yuko, Tafadhali kupokea sasa wetu kwa ajili yenu.」(ママユウコ、わたしたちの捧げ物をお受け取りください)

祐子は言った。

「Asante. Namshukuru kwa ajili ya zawadi zenu. Sasa, Hizi ni zawadi zangu, upendo wangu kwa watu wako.」(ありがとう、頂くわ。では、今度はこれをあなたたちの大切な方にあげてください)

そう言って一度受け取った果物を、そのままその人たちに渡した。祐子はその体形から、身籠っているのがはっきり分かるようになった。人々はそれがバラックの子であることを意識していたが、口にするものは誰一人として無かった。13回目の講演の2日後、バラックがキャンプに姿を現した。普通、バラックが祐子の講演の日以外にキャンプに来ることは無かったので、祐子は少し心配になった。

「Barack, what' s the matter with you?」(バラック、どうしたの?)

「I met with one Japanese man who is looking for you.」(君の事を探している日本人男性に会ったんだ。)

祐子はどきりとした。体中に緊張が走った。

「I didn' t say him anything. He is working under a coffee company, and resides in Kigari now. His name is Katima. Do you know him ?」(わたしは、その人には何も話さなかった。その人はコーヒー会社に勤めていて、キガリに駐在している人だ。名前はカチマという。君の知っている人か?)

祐子は頭がカーッと熱くなった。呼吸を整え、意識に冷静さを取り戻してから、知人にカチマと言う名前が無いかどうか考えたが、特に思い当たる人は居ないと思った。祐子は応えた。

「How does the person look like?」(その人はどんなひとですか?)

「He is a young man who wear thick glasses」(分厚いめがねを掛けた青年だ。)

「I don' t remember of that person.」(わたくしはその人のこと知らないわ)

「I thought I shouldn' t tell you it, but I couldn' t. I don' t want to keep

any secret from you.」(僕は、このことを君に隠しておこうかと思ったが、それはできなかった。君に対して、秘密は持ちたくない)

「Thank you so much. Do you know why the person is looking for me?」

(ありがとう。その人はなぜ、わたくしを探しているのかしら?)

「I don' t know. I suggest he wants to save you.」(分からないけど、多分、君を救い出そうとしているんだろう)

「I have your baby in my womb. I couldn' t back Japan now.」(わたしのおなかの中には、貴方の子が居るのよ。今は、日本に戻れない)

「Yuko, I' m sorry. Forgive me. I charged heavy burden on you」(祐子、許してくれ。君にこんな苦しみを背負わせてしまって)

「Barack, I will live here for a while. I can feel free in my life at any place, if I have appropriate consciousness. Please do not tell him anything about me.」(バラック、わたくしは当分の間、ここで生きることにしたの。どこに居ても、意識の持ち方で、自由に生きられるわ。その人にはわたくしのことを話さないでね)

「Yuko, I' m very sorry」(祐子、ほんとうに済まない)

祐子はその男が、賢の意向で行動しているような気がした。そう思うと尚更「その男に会ってはいけない」と思った。

オーラビジョン・システムの販売の伸びは凄まじいものだった。はじめのうちは大半が個人客だったが、発売から半年が経過したころにはその注文の多くが企業から発注されるようになった。それも殆どの場合複数台の注文だった。賢と原はオーラビジョン・システムがさまざまな形で使われ始めたことを知った。はじめのうちは運勢判断や、占星術などの小規模な店舗からの発注が多かったが、次第にデパートやショッピングセンターなどに出店しているテナントからの注文が来るようになり、専門店が出来てきていることを感じさせた。クレームも多く入るようになって来た。その大半は、使用方法の誤りによるものだったが、中には騙されて偽造品を買わされる者も現れ始めた。オーラビジョン・システムの構造はそれほど複雑ではない。エレクトロニクス系のエンジニアなら

直ぐに真似をして作りたくなるような誘惑を感じるほど、シンプルな構造だった。メカニクな部分はほとんどない。ハードウェア（機構）は作ろうと思えば購入品だけで簡単に出来るものだった。原は初めからそのことを考え、模造できない仕組を組み込んであった。そのため、特許申請もしなかった。その仕組は多次元における共振とそのセンサー回路にあった。ヘルメット部分にある虚次元の脳波をキャッチする仕組が、脳波の虚次元感応信号を取り出していた。有機プラスチックに水を浸潤させる技法と、その水分の割合を維持させるための封印手段、浸透圧の原理を用いた水分の滲出と空中からの湿気の吸入、有機プラスチック内に繊毛状の導電性リードを張り巡らせその末端にフィードバック系を用いた高S/N比のセンスアンプ回路を接続してあった。そこから取り出された信号は、電気回路のようなLC結合による共振回路ではなく、有機材料を用いた特殊な共振回路に接続されていた。その共振回路は、原が分子共振と名づけた1組の繊維系の素材を平行に向かい合わせ、一方をアンプの出力に、他方を信号入力回路に接続していた。原は「このセンサーと共振回路部分はこの世界の科学技術レベルでは作れない」と言っていた。半年後にはウチミシステムズは300人を抱える企業になっていた。株式会社の登録を行政書士に依頼し、有限会社から株式会社への変更も完了していた。株主は賢と原と亜希子の3人に限定した。発行株式はすべて賢が60%、原と亜希子がそれぞれ20パーセント出資する形にした。賢が会長になり、社長は原、亜希子は副社長になった。7人の取締役も置いた。その頃には、収入が半年で400億円に到達していた。すさまじい売り上げの伸びに対応するため、品川のビルのワンフロアを借りて本社にした。福岡、大阪、札幌に支店を出した。これらの業務はすべて会社組織の中で行われていった。賢と原と亜希子の3人は今までとあまり変わらない生活パターンを維持していた。テレビでコマーシャルも打つようになった。賢は東領製作所での業務を重荷に感じ始めた。実際の業務は楠木と梓が処理していて、賢は決済を行うだけになってきていた。しばしばテレビ局がオーラビジョン・システムの特番を組んで放送した。そのころは3人がテレビや、新聞などのメディアに

直接対応することは殆どなくなっていた。どんなに忙しくても、賢と亜希子は祐子に対してコネクションを試みることを怠ることはなかった。しかし、祐子と対話ができることはなかった。片方の意思が相手側に伝えられるだけだった。ある金曜日の夕方、賢は頭の中に祐子の叫び声を聞いた気がした。悲鳴に近かった。

「あなたあー、たすけてください。ああ、あなたあー、皆を救ってください。たすけにきてえー・・・・・・・・」

賢はそのメッセージに意識で応えた。

「どうした、祐子、何があったんだ？ 大丈夫か？」

「どうしたらいいの？皆、殺されちゃったの？ どうしたの？ どうすればいいの？」

しかし、メッセージはそれだけで途絶えてしまった。賢には意味の分からないメッセージだった。少なくとも、悲惨な出来事があったらしいということしか分らなかった。賢は帰宅すると直ぐに亜希子に透視を頼んだ。亜希子も暫くの間祐子を探らえることができなかったが、やがて、病室と思われるところを祐子がおろおろ歩いている場面を透視できた。「あなた、祐子お姉さまが病室のようなところを、ふらふらと歩いています。いえ、そこは病室ではなさそうです。いいえ、以前に見た病室のような場所ではなさそうです。そう、辺りは血だらけ、血だらけです！大勢の人が倒れています。動いている人は誰も居ないようです。ああ、なんてむごいことをするのでしょうか」

「祐子は無事なのか？」

「はい。でも、ふらふらしていて、意識が定まらないようです。あっ、祐子お姉さまが倒れている人のところにしゃがみ込みました。祐子お姉さまから悲しい感情が溢れ出ています。その人は動いていません。血だらけです。ああ、だめです。もう透視できません。分らなくなりました」賢がもう一度通信を試みたが、クウイン・クウインという反響以外には何の応答も無かった。部屋の中は暫し、沈黙状態になった。原、愛子、梓の3人はただ成り行きを見守るしかなかった。全員が塞ぎ込んでいるときに電話が鳴った。亜希子が出た。

「もしもし、鹿島です。賢さんは居ますか?」

「あら、鹿島さん、お元気でいらっしゃいましたか? 亜希子です」

亜希子は賢を呼んだ。

「鹿島さんから国際電話です」

そう言って受話器を渡した。

「はい、内観ですが、鹿島さんですか?」

「賢さん、俺です。久しぶりです。」

「ご無事でしたか? 心配してました。今どうしてますか?」

「俺、ムーンボックスに入ったんですよ。そして、アフリカに駐在しているんです」

「えっ? それじゃ、やっぱり、ルワンダに居るんですか?」

「ええ、よく分かりますね」

「それはもう、鹿島さんがそのようなことをおっしゃっていたから。それで、祐子さんのことは何か分かりましたか?」

「そのことで、電話したんです。いま、ルワンダの国内はまた部族同士の衝突が起きて、大変なんです。今度はブチ族も黙って殺されるようなことはなくて、必死に抵抗を試みているようなんです。俺の調べた限りじゃ、祐子さんはブチ族の戦線のどこかのキャンプに居るようなんです。ブチ族の人の話じゃ、日本人の女性で「ママユウコ」と呼ばれる、天女のような女性が居て、その人がルワンダ人のリーダーの夫と一緒にブチ族の人たちを導いているようなのです。同じユウコですから、もしかしてと思いましたけど、ルワンダ人を夫にしていると云うところがどうしても納得できなくて……」

「そのママユウコはどこに居るのか分かりませんか?」

「はじめは一つのキャンプに居たようなんですが、最近はこちらのキャンプを訪問して歩いて、講演をしたり、指導したり、慰安したり、看護したりしているようです。とても優しく、ブチ族の人は皆、ママユウコのことを慕っているそうです。俺も一度会ってみたいと思っているのです。だけどキャンプの位置が分からなくて、2、3のキャンプの位置は推察できたのですが、彼らは武装していますから、下手に近づくと

殺されちゃいますからね」

「ブチ族のトップはどんな人ですか？」

「確か、バラックとか云う頭の切れる男です」

賢はドキッとした。祐子が「身も心も許した」相手だと思った。しかし、賢は黙って、康介の話の聞き続けた。

「彼の妻子は20年近く前に起きたクツ族によるジェノサイドで殺されました。それからずっと彼は独身のままだったんですが、最近そのママユウコを連れて歩いているようなんです。ママユウコにはバラックさえも敬意を払っていて、彼女が歩く道はバラックが事前にチェックするほど気を使っているとのことですよ」

「そのママユウコって人は祐子である可能性が高いと思います。もう少し詳しく調べて頂けませんか？」

「分かりました。彼は広大なコーヒー園を保有していて、日本にもコーヒー豆を輸出しています。我が社との取引が無いので、俺も何度かコンタクトをとっていますが、彼に祐子さんのことを聞いても、ただ「知らない」と応えるだけでした。ママユウコのことを知ってから、一度直接バラックに聞いてみたのですが、不機嫌そうに「別人だ」と言っていました」

「もし僕が行ったら、バラックさんには会うことができますか？」

「彼は心の広い男ですから、日本人なら問題なく会ってもらえます」

「分かりました。鹿島さん、僕は近いうちにアフリカに調査出張します。もちろん主目的は祐子ですが、ついでにドゴン族のことも調べます。そのときはよろしく願いいたします」

「分かりました。それまでにブチ族のことでバラックのことをもっと調べておきます。亜希子さんによろしく」

電話を切ると、亜希子が近づいて来て言った。

「あなた、祐子お姉さまの所在が分かったのでしょうか？」

「うん、鹿島さんが君によろしくって……祐子はどうやらルワンダの1部族のキャンプに居ようだ。僕は来週にでもアフリカに出掛けて、何とか祐子に会って救い出そうと思う」

「でも、直ぐに会えるのでしょうか？」

「分からない。兎に角やってみる」

梓がその会話を聞いて言った。

「賢さん、来週って言っても、ビザも取らなくちゃならないし、準備が大変ですよ。それに、ほかの土地の調査もされるんじゃないありませんか？」

「梓、以前一緒に調査旅行計画を立てただろう。あれをやろうと思うんだ。今のプロジェクトの向かっている方向に、多少違和感を覚えるようになっていて、個人的には軌道修正が必要だと思っているんだ」

「はい、わたくしもそう感じています。なんか、インフラありきの感が強くなり過ぎていて、本来の目的が忘れられているように思っています」

「そうなんだ。祐子を助け出してから、ドゴン、ケルト、そして、アメリカン・インディアンを調査して、途中でフェニックスに寄ろうと思うんだ」

「それは大変です。明日からその準備に入りましょう。幸いプロジェクトは今軌道に乗って来ていますから、楠木さんをお願いしても大丈夫だと思います」

「梓、手続きなんかをよろしく頼む」

「はい、もちろんです。真剣に取り組まないと準備不足で調査内容にとりこぼしが出かねませんから」

その話を聞いていた亜希子と愛子が相次いで言った。

「わたくしも、ご一緒させていただきます」

「賢パパ、わたし、あさってから夏休みだから、連れて行ってくれる？」

「亜希子はいいいけど、愛子は・・・まあ、いいか。パスポートもこの間取れたことだしな」

「わあ、やった」

「原さん、一人で大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫ですよ。取締役連中が居ますから、いざとなれば彼らに働いてもらいます。あの大久保さんは実務経験が豊富で大抵の事をご存知ですから、彼が居れば大丈夫です」

「そうだね。よろしくお願いします」



賢たち一行がルワンダに着いたのは日本を出た翌日の夕刻だった。アムステルダム、ナイロビ経由でキガリに着いたとき、飛行機の窓から見下ろした閑散とした風景に4人とも「ここが首都か」と思った。入国審査と税関を通り外に出ると鹿島が待っていた。今回の旅行は長期になる可能性もあり、チケットはオープンにしておいた。荷物は4人とも大型のスーツケースを持って来た。国際空港とは謂え周囲は殺風景な感じで、「人びとは一体どこに居るのだろうか?」と感じるほどだった。愛子が言った。

「あーあ、疲れた。アフリカなのに涼しい。わたし、初めての海外旅行でしょう。乗り継ぎの空港に比べてここはひっそりしているように思うけど」

鹿島が言った。

「ここは、そう、町全体が交通量も少なくて静かな街だよ。どうしてこんな国であんな大虐殺が起きたのか信じられないよ。あれはヨーロッパの国にやらされたんだ。全く悪いやつらだ」

賢が言った。

「おそらく、仕掛けたやつらも、こんな酷い結果になるとは思っても見なかったんじゃないかな。指揮したものは憎悪の塊になっていて、実行部隊はもう恐怖と怒りで発狂寸前だったんじゃないかな。悲しいことさ」  
「賢さんの言うとおりでね・・・兎に角、車を持って来るからちょっと待っていて」

鹿島が駐車場に向かって去ると、タクシーの運転手が3、4人寄って来て賢たちに来るように誘った。亜希子が胸を張って言った。

「Kusubiri kwa rafiki wa gari.」(友達の車を待っています)

運転手たちはぶつぶつ言いながら去って行った。亜希子のはじめて使ったスワヒリ語が通じたので大満悦だった。3分ほどして鹿島がジープのようなサファリ車を運転して来た。鹿島は賢と一緒に4つのスーツケースを積み込んだ。賢が助手席、3人の女性が後ろの席に乗った。

「さあ、ホテルに向かいましょう。ところで、お金は両替した?」

「ええ、バゲッジ・クレーム（荷物引渡所）でスーツケースを待っているときに」

車を運転しながら鹿島が言った。

「じゃあ大丈夫だね・・・賢さん、実はこの間電話した日に激しい戦闘があったんです。かなりの方が犠牲になったようだよ。申し訳ないんだけど、あれからバラックとは連絡が取れてないんだ。だけど、ママユウコの居る場所は分かったよ。彼女は無事だったようだ。多分、今もそこに居ると思うんだ。キャンプの病院みたいなところだよ。ブチ族の人に聞いたんだけど、彼女はブチ族全体のリーダーのような存在らしいんだ。2人の男性が補助しているようだよ。ママユウコはすごい人のようだよ。あの戦闘集団を動かしているんだから」

「そうですか。でもここに居ると、戦闘なんてどこで行われているのか、不思議になります。丘が多い所為かひっそりとしていて、とても静かで」賢が言うと、亜希子も言った。

「鹿島さん、その戦闘の行われた場所というのはここから近いのでしょうか？」

「いいえ、かなり、山に入ったところです。表面上は調和しているように見えますが、あのジェノサイドの後、二つの部族には消すことのできない深い傷跡が残ったのです。政府の努力で沈静化しましたが、人々の心の奥にはそのしこりが根を下ろしています。特にブチ族は10人中9人までが殺されたんですから。そう簡単に恨みが消えるわけありません。今生きているブチ族の人はほとんどが身内を失った人たちなんです。でも、実際はクツ族の方が仕返しを恐れて先制攻撃を仕掛けているようですが。政府の目の届かないところでは、未だに激しい衝突があるようです」

「悲しい話ですね」

梓が初めて口をきいた。

「俺、ここでブチ族の人やクツ族の人といろいろ話すことがあるんですけど、皆心の優しい人たちですよ。日本人に似たところがあるんです。ああいう発狂状態になったところも、第2次世界大戦中の日本の軍部と

似たところがあったんじゃないかと思います。ドイツのナチスもユダヤ人に対してジェノサイドをやりましたし、アメリカもベトナムに枯葉剤を撒きましたし、ロシアもアフガン侵攻で大量の殺人を行いましたし、中国も紅衛兵の階級闘争による弾圧や天安門事件の虐殺があったし、スーダン西部ダルフル地方のジェノサイドもあったし、カンボジアもポルポト政権のホロコーストがあったし、俺、人間の意識の底には計り知れない残虐性が潜んでいるように思います」

それを聞いて、賢が言った。

「人間の意識の底はすべての人が繋がっていて、それは一種のエネルギーの場だと思うんだ。そこは狂うことの無い領域で、そこからこの世界に現実として映し出されるときに、その人間の意識に歪が生じていると社会が誤った方向に出来上がってしまう。その歪んだ状態は人間の思考と、感情に対しても作用して、ある傾向性を作り出してしまふ。その傾向性がエスカレートするとまるで共振のような現象が起きてきて、ブレーキが利かなくなるんだと思う。それは特に自分の意識を生起させていない人たちに起こることで、意識に目覚めた人には起こらない現象だと思う。意識に目覚めた人はその心も感情も基底意識に基づいて働いているからね」

「賢さん、難しいですよ。運転しながらじゃとても理解できない」

「あっはっはっは、ごめんなさい」

1時間足らずでキガリの中心街に着いた。静かな街だった。その静けさも、人々の沈んだ心を反映しているように4人には思えた。ホテルは小高い丘の上にある4階建ての建物だった。5時前だった。先ずチェックインし、シャワーを浴びてから食事に出ることにした。賢と愛子、亜希子と梓のペアで2部屋を借りた。部屋はきちんと清掃されていてきれいだったが、賢も梓もやはり他国のホテルに比べると、設備の点では物足りなさを感じた。愛子だけははしゃいでいた。

「賢パパ、すごい。ベッドが二つもあるわ。ほら、ここの洗面所の鏡、すごく大きい。きれいだよ」

「愛子、これからもっとすごいホテルに泊まれるよ。まず、シャワーを

浴びなさい。やり方は分かるね」

「はい、賢パパ」

そう言うと、愛子はスーツケースを開けて下着を取り出し、シャワールームに入って扉を閉めた。暫くして、愛子が裸のままシャワールームから飛び出してきた。

「賢パパ、助けて！コックを捻<sup>めく</sup>ったら水の後で熱いお湯が出てきて、コックを回しても温くならないの、火傷しちゃう」

賢は可笑しくなって、笑いながらシャワールームに入って行き愛子に操作を教えた。

「愛子、これが水を出すコック、こっちが温度を調節するコックだよ。ちょっと分かりにくいからな。ほら、丁度いい温度になっただろう」

「なんだ、そうなんだ。賢パパ、ありがとう」

愛子のシャワーに時間が掛かったので、賢はシャワーを浴びずにそのまま出ることにした。

「賢パパ、ごめんなさい。わたしが時間が掛かったから」

「いいんだよ。帰ってから浴びるから」

BABA というレストランに行った。象の人形がゲートを飾っている他には、囲いや植え込みなども無く簡素な造りだったが、康介は「この辺りでは一流のレストランだ」と言った。4人は全て康介に任せることにした。康介はバナナと肉を煮込んだシチューを頼んだ。甘さの感じないバナナで芋のシチューのようだった。味は見た目から来る予想を超えて美味だった。食事を終わると、康介はルワンダのビール、プリムスを賢のグラスに注ぎながら言った。

「このジェノサイド記念館、見に行きますか？」

愛子が訊いた。

「ジェノサイドって何ですか？」

「民族の殲滅、皆殺しのことです」

「そんな残酷なことがここで起きたのね？」

「20年近く前にクツ族出身の大統領の乗った飛行機が墜落して、大統領が死んだんだ。その墜落事故はブチ族が仕組んだものだという噂が広

がって、クツ族がブチ族を種族ごと抹殺しようとしたんだ。当時の政府も加担してね。ブチ族の9割の人が抹殺されたんだ。1割の人は海外に逃れたりして一命を取り留めた。悲惨な事件さ。だけど、そのうわさを誰が流し、誰が広めたかが問題だ。扇動者がいたようなんだ。海外のね。記念館には当時の虐殺死体そのまま展示されているんだ。ミイラ化した死体から亡くなる前の苦しんでいる顔の表情が、今でも読み取れるよ」

「わたし、行かない」

愛子が言った。梓も言った。

「わたくしも遠慮しとくわ」

賢が言った。

「僕は連れて行ってください。意識を透明にして対面したい。多分その当時の意識の写像が残っているから、話し掛けて帰霊できるものは帰霊させてやりたい」

賢の言葉を聴いて、亜希子が言った。

「わたくしも一緒させて頂きますわ。悲しくて耐えられるかどうか分かりませんが」

「それじゃ、その間梓さんと愛子さんにはホテルの前の街の中でも見物してもらいましょう。街は安全ですから大丈夫です。3人で行って来ましょう」

「それはだめよ。言葉だって分からないもの。わたしたちも一緒に行く。だけど、記念館には入らない。わたし、そういうのだめだから」

「わたくしも一緒します。記念館に入らないで、車の中に愛子さんと一緒に居ます」

賢が言った。

「ところで、ママユウコとはいつ会えるかな？」

「それが一番大事なことでしたね。だけど、こればかりは分からないんです。最近のブチ族の難民解放戦線のキャンプはちょくちょく移動してしまうので、場所が特定できないのです。現在は多分、コンゴとの国境にあるキヴ湖の周辺に移っているようです。俺の調べた中で可能性の高いところ3箇所に行ってみましょうか？」

賢が言った。

「我々は、鹿島さんを頼るしかありません。でもそこに行くのに危険はありませんか?」

「キガリの近くにも1箇所ありますが、そこはそれほど危険だとは思いません。他の2箇所は見た目は安全そうに見えますが、何時クツ族の愛国戦線の残党が襲って来るか分かりません。彼らはジェノサイド条約が制定されてから、表面上は姿を消しましたが、地下にもぐったとも、外国に逃れたとも云われていて、機会を狙っています。クツ族の中でジェノサイドに加担した者をジェノシデールと言うんだけど、20万人くらいいたらしいんです。同じクツ族でも穏健派の人は逆に、反逆者として残酷な扱いを受けたようなんだ。殺さなければ殺されるそんな地獄が展開していたようです。トータルで100万人くらい殺されたようだよ。人口の2割にもなるんだ。大人子供の区別無く、しかも女性は9割方強姦されたらしい。指導者のポリシィだったようだよ。ブチ族を汚すという野蛮なポリシィだ。実際にはそのジェノシデールの中でも、指揮をしたのは政治家や実業家なんかの上層階級の間人で、教育を受けていない人間が扇動されて虐殺を実践させられたらしい。いつの時代も同じだな」

「絶対僕をそこに連れて行ってください。僕だけを」

亜希子が言った。

「わたくしも連れて行ってください」

「いや、駄目だ。どんな危険があるか分からない」

「いいえ、わたくしは死んでもかまいません、祐子お姉さまをお救いするために命を捧げるなら本望です」

「馬鹿なことを言うんじゃない!これだけは駄目だ。亜希子と愛子、それに梓はここに残ってもらう」

「いやです!わたくしは絶対に連れて行って頂きます」

これほど頑固な亜希子の姿を賢は初めて見た。亜希子は唇を噛み締め、目に涙を溜めている。その意思の強固なことを物語っていた。梓が言った。

「いずれにしても、わたくしは同行いたします。リーダーが何とおっし

やろうとそれが任務ですから」

「駄目だ！万が一、僕たちが攻撃を受けて帰国できなくなった場合は、梓にふたりを連れて帰ってもらわなくてはならない」

「リーダー、おふたりが攻撃を受けて窮地に陥ったとき、おふたり以外に誰も居なければどうすることもできないでしょう。これで終わりじゃないんです。ここで攻撃を受けても逃れなくてはならないと思います。それがリスクヘッジでしょう。わたくしたちは、そのときリーダーたちをお救いできると思います」

結局、十分な安全確認をしながら、全員でママユウコを探しに行くことになった。康介が知り合いのブチ族の若者に、最も可能性の高い現在のママユウコの居所を調べてもらおうと言った。4人はそのままホテルに戻って休むことになった。部屋に戻ると愛子は賢にシャワーを浴びるように言った。賢は喜んで愛子の忠言に従った。ふたりは早々にベッドに潜り込んだが、愛子はなかなか寝付かれないようだった。翌日は朝のうちに、康介がブチ族の友人に電話してママユウコの居そうな場所を調べてもらうように頼んだ。調べるのに丸1日は掛かるとのことだった。キャンプには翌日から廻ることにした。朝食をホテルのブッフェで摂ると、4人は迎えに来た康介の車に乗ってキガリ市内にあるジェノサイド・ミュージアムに出掛けることにした。キガリの市内は静かで、道路も舗装されていた。人影はあまり見掛けないが、時々車が通り過ぎて行った。ほとんどが日本車だった。バイクも通ったが、やはり日本のバイクのように見える。康介が車を停めて通り掛かった女性に道を尋ねると、周りに居た男性や女性4、5人が集まって来て、わいわいと話している。4人にはそれがとても親切な行為に感じられた。

「ジェノサイドなんて無かったんだ、意識の中では」

賢が言った。市街地から10分ほどでミュージアムに着いた。ここには遺体などが無かったので4人も入館した。入場料は無料だった。博物館はルワンダのジェノサイドの過程に関する展示と、ドイツのナチスやカンボジアのポルポトなど世界各地のジェノサイドに関する展示、犠牲者についての展示の3部門に分かれていた。英語表記があったので、愛

子以外は意味を解することができた。愛子も途中で何度も目を覆いながら、分からない単語の意味を亜希子に聞いて真剣に展示を観ていた。人々の苦しんだ痕跡を見る辛い時間は3時間に及んだ。博物館を出てから、昼食を摂って、そこからムランビという町のジェノサイド・メモリアルに向かった。そこは当時の残虐さがそのまま窺えることで有名だと康介が言った。2時半にはムランビに着いた。寂寥を感じる村だった。ジェノサイド・メモリアルは技術学校にする予定だった場所とのことだった。この土地は、国内でも最も激しく殺戮が行われた場所の一つであるらしい。長年にわたる民族間の対立が、大統領機の墜落を機に無差別大量虐殺の引き金となり、人口の85%を占めるクツ族による15%の少数派ブチ族と反逆者の抹殺。子孫を残させないため女子供まで容赦なく殺された。目の前で自分の親や子供、友人を殺された。時として友人や肉親を殺さなければ、自分が殺された。か弱いものや幼児を壁に叩きつけて殺した。死者100万人、難民200万人のジェノサイド。8帖程の部屋におよそ50体の遺体が木の台に置かれ、白くミイラ化している。多くの部屋があった。ここにある遺体の主だった人たちはジェノサイドの犠牲者のほんの一握りの人達に過ぎない。アキレス腱や首筋が切られた遺体もある。殺人者が殺すのに疲れて、アキレス腱や首筋を切って逃げられない様にした。翌日体力が回復してから殺す為だ・・・もう人を殺すことを何とも思わなくなってしまった狂気。ジェノサイドが起きて開校できず、そのまま遺体や遺品を展示するメモリアルにしてしまったとのことだった。梓と愛子は車の中で待機することにした。入場は無料だった。教室だった一つ一つの部屋の中に目を瞑りたくなるような数の遺体が収容されていた。一応保存処理はされていたが、独特の異臭が立ち込めていて、胸が苦しくなってきた。埋葬されていた遺体まで掘り起こされて展示されていると鹿島が言った。賢がふと見ると赤いカーネーションが遺体の前に供えられていた。亜希子は目を覆うことはしなかったが、頬が涙でびしょり濡れていた。ほとんどの遺体が頭部を割られたり、頭蓋骨が陥没したりしている。中には頭が押し潰されているものもあった。乳幼児から成人まで、ありとあらゆる人々が殺されていた。



世界平和を祈願する歌の歌詞を書いた紙が、賢の眼には空しく映った。まだ数十年しか経っていないジェノサイドの傷が、癒えているとはとても思えなかった。遺体の一部には頭髪が残っていた。爪の痕もはっきり残っている。これはまだ現実なのだと思はれた。亡くなった人々の衣類も、意識的になのか無造作に竿に吊されて展示されている。どの遺留品も血に染まり、色褪せて変色していたが、かわいらしい少女を連想させるピンクの小さな靴下やオレンジ色のフリルの付いたスカート、外出用だったと思われる洒落たデザインの靴・・・亜希子は、そこで泣き崩れてしまった。殺された人びとがその時までそこで生きていた姿がはっきりと見えてきた。生活していた人びとは平和な日々から一気に煉獄に突き落とされた。賢は瞑目した。表層の世界に近い次元に、無数の彷徨える魂が見えた。まだ自分がどうなったのか理解していない魂も、肉親への執着で動けない魂もあり、恨みと悲しみで狂ったようになっている魂もあった。その無数の魂に対して賢は祈りを捧げた。意識の話す言葉は心だったので、日本語で話し掛けた。日本語もスワヒリ語も違いは無いはずだった。多くの魂は賢の言葉に耳を傾けることは無かったが、一部の女性たちの魂が賢の周りに集まって来た。その数は次第に増え100名ほどになった。

「あなたたちは既に亡くなっています。分かりますか？あなた達は民族間の争いの犠牲になりました。でも、あなた達は、殺害に加わった人たちに比べればまだ幸せです。彼らはこれからずっと、何生にもわたって、自分の行ってしまった殺人という行為のために、自分自身を許すことができなくて苦しまなくてはなりません。あなた方にとって、その人たちを許すことが難しいのは分かりますが、だけど許してあげてください。彼らは操られ、自分を失って狂気に走ってしまったのです。彼らを哀れと思って許してあげてください。あの幸せだった頃の事を思い描いてください。一切の恨みや憎しみを捨てて、明るい世界に向かって進んで行ってください。ただ憎しみや恨み、それに肉親に対する執着を捨てるだけでいいんです。それで、この苦悶に明け暮れる苦しい世界から、楽しい明るい世界に出てゆけます。そこで、皆でまた希望に満ちた生活を

送ることができます。たった今から憎しみ、恨み、そして執着を捨ててください」

賢がふと迷える魂たちから自分の傍に意識を戻すと、横に亜希子が居て賢の話の聞いていた。亜希子も瞑想して賢の意識の中に入ってきていた。亜希子が意識で話をした。

「皆さん、わたくしは皆さんを愛しています。皆さんとわたくしは一緒なのです。皆さんも、皆さん自身を愛してください。ご自分を好きになってください。そして周りの皆を愛してください。以前はそうだったでしょう。以前のようにすべての人を愛してください。その愛の心が貴女をこの苦しい場所から、光り輝く美しい場所に導いてくれます」

賢は亜希子がこういう話ができるようになっていくことに驚きを感じた。集まって来た何人かの魂が消えて行った。残った魂も、明らかに執着が弱くなってきているように見えた。しかし、賢と亜希子の意識に興味を示さなかった魂は依然として苦しみの中で葛藤していた。案内係が「何か質問はあるか？」

と聞いたが、3人とも無言だった。案内係は

「We must never do it again. Please transfer this message to your country.」(われわれは二度とこれをしてはいけない。あなたの国に、このメッセージを伝えてください)

と言った。賢も亜希子も康介も無言で頷いた。

出口でサイン帳にサインをし、コメントを書いた。賢は

「How can I accept this.」(どうやったらこれを受け入れられるか?)

と書いた。亜希子は目にいっぱい涙を溜めて

「I forgot grief.」(悲しみを忘れてしまった)

と書いた。賢が5人分まとめてドーンションを行った。3人が車に戻って来ても、梓も愛子も何も聞かなかった。車に乗り込むと亜希子はまたしゃくり上げた。涙が眼から溢れ出た。食事を済ませて宿に戻ってから全員賢の部屋に集まった。翌日の心の準備をするためだった。先ず亜希子が透視を行ったが、祐子の姿は捉えられなかった。次に賢がテレパシー通信を行おうとしたが、クゥイーン・クゥイーンという応答しか返

って来なかった。賢が3人に忠告した。

「決しておどおどしては駄目だぞ。僕らは日本人だ。戦闘の真っ只中にさえ入らなければ、親日的な国だからいきなり攻撃を受けることはない。もし危険な状況になったら、意識をはっきりとさせていることだ。いいね。銃や手榴弾は絶対に当たらないと確信して望むことだ。一切の不安を捨て去って行動しよう」

翌朝5人は緊張した面持ちでホテルを後にした。亜希子は昨日、自分が口にした「死んでもいい」という言葉が、頭の中できぐるぐる廻っているのを意識していた。賢は出発前に神に祈りを捧げた。キガリの中心街を出て暫く走ると丘がなくなり、人の気配も建物も何も無い平坦な道になった。康介はそれでもそこはキガリの中だと言った。やがて左手に山のような高い丘が現れた。そこからは低い山々が連なっていた。康介は左折して山に向かう一本の細い道に入った。道の両脇は2メートルほどの灌木が続き、ほどなく山と山の間でこぼこ道の中に入り込んで行った。森の中に入ってゆくようである。キガリの中心から2時間ほど走った頃、右手に平屋の建物が見えた。康介が言った。

「あれがキガリのキャンプです。友人がママユウコの居る可能性は五分五分だと言ってました。俺も3回来てますけど、ママユウコには会えませんでした。一度はバラックに会えましたが、今日は彼も居るかどうかわかりません」

梓が平屋の大きな建物を指差して言った。

「鹿島さん、ここは武装集団の居るところなのですか？あの建物は何ですか？」

「武装集団はあの建物には居ません。ここからは見えませんがもう少し先の岸壁にある洞窟に居るようです。俺も直接聞いたわけじゃないから、詳しいことはわかりません。あの大きい建物は病院のような建物で、バラックがあそこに居ましたから、多分ママユウコが居るとしたらあそこだと思います」

建物にあと50メートルほどというところで、道路の両脇から10名ほどの武装兵が銃を構えて飛び出して来た。康介と賢は冷静さを保ち、車

を止めた。3人の女性も冷静さを装っていたが、心臓が飛び出すほど驚いた。

「Nani wewe. Kile ni sababu kuja hapa.」(何者だ?何しに来た?)

「Sisi ni Japani. Biashara ya kahawa, Tukaja kuona wawakilishi.」(我々は日本人だ。コーヒーの取引のために、代表者に会いに来た)

「Ambaye unataka kuona nini?」(誰を訪ねて来た?)

「Mara ya mwisho, Mimi kujadili kwa Barac. Mimi nataka kusikia jibu.」  
(前回、バラックと交渉した。回答を貰いに来た)

「Barack si hapa.」(バラックは、ここには居ない)

「Mimi wala kuhitaji kuonana naye. Mimi nataka kukutana na mtu anayehusika.」(バラックでなくてもいい。代表者に会いたい)

「Kusubiri dakika. Nataka kwenda kwa ofisi ya kuthibitisha hilo.」(少し待て、確認して来る)

一人の武装兵士が建物に向かって駆けて行った。賢と梓はひやりとした。約束したのかどうか鹿島に聞いたかったが、威厳を維持するために黙っていた。鹿島は泰然としていた。暫くして、兵士が戻って来て言った。

「Mtu kuwajibika si hapa sasa. Lakini, tafadhali kuja in」(今は責任者が居ないが、取り敢えず中に入ってくれ)

鹿島は

「Mimi kuelewa.」(わかった)

と言うと、車を建物の前まで進めて停め、4人を促して車から降りた。賢が康介に聞いた。

「約束してあったのですか?」

「いいえ、コーヒーの話をしたから、彼らも応じたんでしょう」  
車から降りると兵士のリーダーのような男が言った。

「Wewe tu. Watu wengine hawawezi kuja.」(お前、一人だ。他の者は中に入れる訳にはいかない)

「Hii ni rafiki yangu. Alikuwa hapa kutoka Japan hivi sasa, kwa ajili ya biashara ya kahawa.」

(これは友達だ。コーヒーの取引の為にはるばる日本から来たばかりだ)

兵士はどうやら、若い愛子や亜希子が居るのが気になっているようだった。

「Ambao ni hawa wanawake?」（その女たちは誰だ）

「Wao ni familia yake.」（こちらの人の家族だ。旅行を兼ねて来た）

「Wanawake lazima kukaa katika gari.」（女は車の中に居ろ）

「Mimi kuelewa.」（分かった）

賢はやや警戒心を抱いたが、兵士達が平常心でいることを見て取った。3人を残しても大丈夫だと考えた。亜希子は中に入りたかった。しかし、状況を考えて我慢した。愛子はずっと緊張しっ放しだった。兵士がふたりを連れて先に立って建物の中に入った。薄暗い土床を進むと奥に通じる通路に繋がっていて、その通路の左右に部屋がある。兵士は右側にある部屋の扉をノックしてから開けた。ふたりは緊張した。そこには何人かの現地人らしい女性たちが居た。賢は瞬間的にそこにいる者達の顔を認識した。祐子は居なかった。ルワンダの女性だけのようだった。女性は7人居た。皆、一斉にふたりに視線を向けた。その中の一人が聞いた。

「Wewe ni nani?」（どなたですか？）

「Alikuja hapa kwa ajili ya biashara ya kahawa. Wapi Mama Yuko?」（コーヒーの取引に来たようだ。ママユウコはどこにいらっしゃいますか？）女性が応えた。

「Mama Yuko hakuwa na kuwa hapa leo.」（ママユウコは今日はここには見えてない）

兵士が康介に向かって言った。

「Mtu kuwajibika si hapa.」（責任者は留守だ）

康介は尋ねた。

「Ni Mheshimiwa Barack hapa?」（バラックさんはいらっしゃいませんか？）

「Barack si hapa. Mama Yuko ni mwakilishi. Yeye hakuwa na kuwa hapa leo pia.」（バラックは居ない。ママユウコが総責任者だ。だが、ママユウコも今は居ない）

ふたりはそれ以上問い詰める訳にはいかなかった。諦めて帰ろうとした

ときに一人の女性が声を掛けた。マリゼだった。

「あなたたち・・ Kijapani, si wewe. Unatafuta Mama Yuko, si wewe?」  
(あなた達は日本人でしょう。ママユウコを探しているんじゃないの?)  
康介が応えた。

「Ndiyo, sisi ni Jpanese. Jina langu ni Kashima. Yeye ni Uchimi. Tunataka kujadili kuhusu biashara ya kahawa pia.」(はい、そうです。わたしは鹿島、こちらは内観と申します。でもコーヒーの取引もお願いしたいのです)

「Hataki kukutana na Kijapani.」(彼女は日本人にはお会いにならないわ)

「Kwa nini?」(どうしてですか?)

「Yeye ni Mungu ambaye amekuja kwa Ruwanda kutoka Japan na kuokoa watu. Yeye si Kijapani sasa. Yeye hutuongoza.」(あの方はわたし達を救うために日本から、ルワンダにやって来た神様なの。もう日本人じゃないわ。あの方がわたし達を導いてくださっているのよ)  
横に居た女性がマリゼを突いた。余計なことを喋るなどでも云う仕草だった。康介は言った。

「Tunataka kukutana na Mama Yuko kwa njia zote. Na, Sisi nataka kujadili juu ya biashara na yake.」(ママユウコに是非会いたい。そして、取引の話をしたい)

それに対しては誰も応えなかった。兵士がふたりにこの場所を出るように促した。ふたりは礼を言うと部屋から出た。建物の入り口とは反対側の先は広い空間になっているようだった。鹿島が兵士に向かって言った。

「Chumba mwishoni ni hospitali?」(この奥は病院ですか?)

「Ndiyo.」(そうだ)

「Naweza kuona huko?」(拝見させて頂けますか?)

「Nataka kwenda kwa ofisi ya kuuliza hivyo.」(事務所で聞いて来る)

兵士は直ぐにマリゼを連れて戻って来た。マリゼは黙って先頭に立って病室に向かった。賢は驚いた。そこはまるで野戦病院の看護病棟のようだった。およそ50人ほどの患者が所狭しと床に就いていて、看護婦達

が負傷者の世話をしていた。賢はまた、即座にすべての看護婦を確認した。6人の看護婦が居たが、やはり東洋人は一人も居なかった。多くの患者は、まだ包帯に血の跡が付いていた。賢はその光景を頭に焼き付けた。マリゼに礼を言うとふたりは兵士に附いて車に戻った。車に乗り込むと、巫希子が言った。

「祐子お姉さまはいらっしゃいませんでしたか？」

賢は頭を横に振った。兵士に礼を言うと康介は直ぐに車を発進させた。帰りの車の中で賢は今見てきた光景を3人に説明した。梓が言った。

「それじゃあ、ママユウコが祐子さんかどうかまだ分からなかったのですね。」

「でも、看護婦と思われる女性が、「ママユウコはルワンダを助けるために、日本から来た神様だ」って言っていた。だから、祐子である可能性が高いと思う」

「祐子という名前は普通にある名前だから、まだそうかどうか分からないわ」

梓の慎重な言葉に対して巫希子が言った。

「いいえ、きっとママユウコは祐子お姉さまですわ。わたくしには分かります。神様のような方は滅多にいらっしゃらないわ。誘拐船でも、皆が祐子お姉さまのことを神様だとおっしゃっていたでしょう。祐子お姉さまに間違いないわ」

道の状態がかなり悪くなってきている。ガタガタと揺られながら賢が言った。

「もしそうだとしても、会うのは至難の業だ。ママユウコは日本人には会わないと言っているらしい。なぜだ！ 理由が分からない」

自動車のエンジン音と、ガタガタ揺れる音のなかで、賢の言葉は空しく響いた。巫希子は黙ってしまった。そして暫くしてから独り言のようにぼつりと言った。

「何か訳があるのですわ。あのお優しい祐子お姉さまが、わたくしたちに会うのを拒むはずはありませんもの」

巫希子の声も騒音の中に埋もれてしまった。巫希子の意識は不安定にな

っていた。

「わたくしはずっと、人のために生きたいと思っていました。今もそう思っています。でも、どうしたら人のために働けるのか分かりませんでした。今日沢山の人の遺体を見ました。苦痛の中に命を失った人たち、その人たちを前にしても、わたくしは「愛している」と言うのが精一杯でした。なのに、祐子お姉さまは、ご自分が苦境の真ん中にいらっしゃっても、ご自分のことを省みることなく、人びとのために生きていらっしゃいます。祐子お姉さまは、よく、「わたしには人を助けることなんてできない」とおっしゃっていました。なのに、大勢の人たちをお救いになられています。一番愛していた方にお会いになることも拒否して、ルワンダの人たちの為に、いいえ、苦しんでいる人々のために生きておられます。わたくしはどうしたらよろしいのでしょうか？」

梓が言った。

「それは亜希子さんだけじゃないわ。わたくしたち、皆がそうよ。もし、あのママユウコが祐子さんだとしたら、わたくしは自分の生き方が恥ずかしくなります」

愛子も言った。「祐子さんて、すごい方だったんですね。賢パパのことをすごく愛していて、ただ賢パパを頼るだけの方だと思っていたのに、全然違ったんですね。わたし、びっくり」

「皆、祐子から金色の光が出ているのを知らないだろう。凄い光なんだ。目が開いていられないこともあるんだ。金色は慈悲の色だ。祐子の意識の底には慈悲のエネルギーが溢れているんだよ。心臓の辺りにあるアナハタチャクラが完全に開いているんだろう。僕らに真似のできないような、人の苦しみを感じ、救い出すことができるものすごい力を持っているんだと思う」

「ママユウコとおっしゃる方は祐子お姉さまに間違いありません」

ホテルに着いたのはまだ4時を少し廻った頃だった。一旦全員賢の部屋に集まり、翌日の相談をしてからホテルで食事をするようになった。5人が賢の部屋に入ると賢が亜希子を見て言った。

「亜希子、顔色が良くないが、どこか具合が悪いのか？」



「いいえ、わたくしはあの遺体を見てから、体の震えが止まりません。体中に悲しみが広がったような感覚がしています。それに、祐子お姉さまにもお会いできませんでしたし。ああ、わたくしはどうしたらいいのでしょうか？」

「亜希子、気をしっかり持てよ。今回の出張はまだ始まったばかりだ。これからどうやって祐子を探したらいいか、考えなくてはならないからな」

康介が言った。

「いずれにしても、まずはママユウコが祐子さんかどうかを確かめなくちゃなりませんね。何かいい方法はありますかね」

梓が言った。

「亜希子さん、透視がおできになるでしょう。試してみませんか？」

「そうだ、亜希子、できるか？」

亜希子は了解して、椅子に座って透視を試みた。しかし、どうしても祐子の姿を捉えることはできなかった。

「駄目です。意識を集中させることができません。どうしても瞑想状態に入れないのです」

亜希子は悲しそうに言った。焦燥感に駆られているようだったが、焦れば焦るほど、瞑想から精神統一に移行するのが難しく感じられてきた。

そのとき、愛子が言った。

「賢パパ、賢パパ、見て、ボールよ、あのボール」

その言葉に、全員が愛子の指差す方向に注目した。いつの間にかボールが康介の腰掛けている椅子の手前のテーブルの上に乗っている。

「どうして、ボールがここに戻って来たんだろう？」

賢は腰掛けていたベッドの縁から立ち上がると、テーブルのところに行ってボールを持ち上げてみた。全員立ち上がった。ボールは金色の光を放っている。賢は掌から腕に向けて電気が流れたような痺れを感じた。

そして、意識の奥に声が響いた。

「あなた、わたしよ。分かるかしら？あなたがわたしを探しに、ここまで来てくれたと連絡があったわ。ありがとう。とっとうれしくて、涙

が流れるわ。あなたに会いたい。今すぐにでもあなたの胸に飛び込んでゆきたい。そして、皆さんにもお会いしたい。でも、今はそれができないの。わたしはもう、以前のわたしじゃないわ。もう以前の自分には戻れないの。わたしには自分という意識が無くなったの。この人たちは悲惨よ。あのジェノサイドの後の苦しみの中に生きているの。わたしは皆と一緒にここを天国にするの。それまで、ここで生きるわ。どうか、わたしを探さないでね。あなたに会ったら、この人たちを見捨てることになってしまう。どうか、わたしを探さないで。お願い！」

賢の瞳に涙が浮かんだ。4人は賢の顔を無言で見つめている。賢は瞑目しテレパシーで語り掛けた。ボールが薄水色に変化した。

「祐子、無事なんだな？お前が苦しみの中に自分自身を投げ込んで、周りの人々を導いているのが分かった。お前がそれほどまでに言うのなら、もうお前を探さない。だが、一つ教えてくれ。ママユウコというのはお前のことか？そこで、お前が何をしているのか教えてくれ。それから、俺たちに何かできることは無いのか？直ぐ近くまで来ているんだ。お前の為にできる限りのことをさせてほしい」

すぐに賢の脳裏に祐子の声が響いた。

「あなた、ありがとう。あなた、もしできるのなら、世界中の国々に、わたしたちを救ってくれなくてもいいから、手を出さないでほしいと伝えてほしいわ。この人たちは、今は憎み合っているけど、元は心の優しい人たちだったの。いろいろな国の思惑で、この国は粉々になってしまったの。今、それを元に戻そうとしているの。世界の国々に対して、自分たちの国の繁栄のみを願って、他国を犠牲にしないで欲しいと伝えて欲しいの。あなたの教えてくれたように、愛に満ちた本来の意識に立ち戻って生きるように伝えてほしいの。自我に惑わされた覇気と欲望の心を捨てて欲しいと伝えて欲しいの。そうよ、わたしはママユウコと呼ばれているわ。わたしはここで看護婦の責任者をしているの。それと首長のサポートをしているわ。この身にブチ族の首長の子供を宿しているの。だから、あなたには会えないの。ごめんなさい」

賢は悲しさがこみ上げて来て、青色に変化したボールをテーブルの上に

置くと、ポケットからハンカチを出して涙を拭いた。全員がじっと賢を見つめていた。椅子から立ち上がって、一步退いて賢の姿を見つめていた康介が、ふとボールに貼り付けてある紙に気がついた。ビニールの袋を切り取ったような破片が貼り付けられていた。康介はボールを持ち上げ、上に翳した。

「ここに、何か書いたビニールが貼り付けてある。読んでみるよ・・・  
・「わたしは元気です。わたしはもう以前の祐子ではありません。この国の人たちと生きることにしました。どうかわたしを探さないでください」・・・これは、祐子さんからだ・・・でも、どうしてこんなボールが・・・」

康介がボールをテーブルの上に戻すと、賢が涙を拭って言った。

「これは僕たちが祐子に向けて送ったボールなんです。時空を超えて祐子の元に行っていたようです。いま、祐子のメッセージを携えて戻って来たのでしょうか」

康介は驚いて大きく目を見開いたが一瞬言葉に詰まった。梓が言った。

「本当のことなのですね。まるでS F映画を観ているようです」

「何だか頭が変になりそうだな」

康介が独り言のように言ったが、まるで康介の言葉が聞こえなかったかのように亜希子が賢に尋ねた。

「あなた、祐子お姉さまと交信できたのですか？」

「うん、今話した」

「何とおっしゃっておられましたか？あなた、是非、わたくしにも教えてください」

「うん、今鹿島さんが読んだとおりのことを言っていた。ママユウコはやはり祐子だった。ルワンダの人たちと一緒に生きると言っている。だから自分を探すなど・・・」

「どうして、どうしてなのですか？祐子お姉さま、どうしてご自分をさらった人たちの為に生きるとおっしゃるのですか？どうして・・・」  
亜希子は涙を流しながら叫んだ。賢は祐子の置かれている状況を理解していた。しかし亜希子たちには祐子がブチの首長の子供を宿しているこ

とを知らせてはまずいと思った。

「祐子の意識はもう、僕たちの意識の段階にはないんだと思う。善とか悪という基準はないんじゃないのかな。今は苦しんでいる人を救い、この場をパラダイスに変えようという意味しかないように見えるよ。もう、僕には手が出せない」

涙を流しながら亜希子が言った。

「あなた、どうして、そんなことをおっしゃるのですか？祐子お姉さまが直ぐ近くにいらっしゃることがわかったのですから、何としてでもお助けしたいですわ」

康介も亜希子に同調して言った。

「そうです。僕らはそのためにずっと努力してきたんです。やっと祐子さんの所在がはっきりして、しかも、今は祐子さんがある程度自由裁量で行動できる立場にあるのですから、このチャンスに何とか助け出すべきだと思うんです。今行動すれば、祐子さんを助け出せるような気がします。賢さん、思い直してください」

賢は伏し目がちに下を向いて、黙ってしまった。賢は再び両手でボールを持ち上げた。そして意識で祐子に語り掛けた。

「祐子、聞こえるか？いま、ここには亜希子、鹿島さん、愛子、そして田辺さんが居るんだ。みな、お前を救うために来た。皆、絶対にお前を救い出すと言っている。それでも皆に会わないのか？」

「あなた、ごめんなさい。わたしを苦しめないで。今はこの道しかないの。わたしも皆に会いたいわ。だけど、ルワンダの人たちを救うことのほうが大切なの。ごめんなさい。あなた、愛しているわ。皆のことも、とても愛しているわ」

ボールがピンク色に変化した。賢は祐子に応えた。

「分かった。もう、会おうなんて言わない。だけど、今後もこのボールで交信することだけは続けよう。このボールは、身に迫る危険を色や、点滅で知らせてくれるし、相手の感情の変化を見るときに役立てることもできる。そして、俺や亜希子との交信の時にこのボールに向かって意識を投げかければ、相手にその意思があるときは交信することができる。

そうだ、丁度ネットワーク・ルーターの役目をしてくれる。もう一つ、これは大きくすることもできるし、小さくすることもできる。そう命じれば従ってくれる。いいね。俺たちの中にはこのボールを使ったコミュニケーションという手段がある。どんなときでも意識を投げ掛けてくれ。俺はいつもお前に意識を向けているから」